

特253  
12A

納本

傳道地誌要

始



時253  
128



道地誌要

143





東京大学図書



まへがき

本教の教會發達史は本教の傳道史であり、同時に本教の發達史であります。之を明らかにすることは、先輩の道を顯彰することになるのであります。於是此の教會發達史に、將來の傳道者への手引きとすべきものを加へ、尙地文を加味したものを要約して、茲に傳道地誌要として編纂上梓することゝ致しました。故に本書は歴史篇即ち傳道史と、地理篇即ち人文地誌の二篇を併せ収録したものであります。

本書は天理教授に於て、教會史又は傳道地誌の教授上、生徒の参考に資し、筆記に代用せしめるために暫定的なものとして編纂上梓することになつたのであります。編纂に當つては、能ふ限り正確を期したのではあります。何分にも正確な記録の少ない昔の事も多く、又廣範圍のために十分調査研究も出来なかつたために、尙研究

の餘地も多いのであります。大方の叱正を頂きまして、逐次増補訂正を加へ、次第に内容を充實致し度いと存じます。

本書を使用せられるに當りては、常に教室に於ける講義の精神に注意し、本書を併せ用ひられて、先輩の道を知り、各自將來への指針として、十分會得せられるやう心がけつゝ、學習して頂きたいことを希望致す次第であります。

昭和十四年三月末

編者 識

### 傳道地誌要目次

#### 歴史篇

第一章	初期傳道	(三)
第二章	近畿傳道	(六)
第三章	教會本部の設立	(一七)
第四章	中部地方	(二〇)
第五章	中國四國地方(兵庫縣及丹波を含む)	(二七)
第六章	九州地方	(三三)
第七章	關東地方	(三九)
第八章	奥羽地方	(四四)

第九章 北海道……………(四)

第十章 各教會の設立……………(五)

第十一章 一派獨立……………(六)

第十二章 神殿建築と海外傳道……………(七)

地誌篇

序説 全國各地方教勢概観……………(八)

地方誌

第一章 東北地方……………(九)

第二章 關東地方……………(一〇)

第三章 中部地方……………(一一)

第四章 近畿地方……………(一二)

第五章 中國地方……………(一三)

第六章 四國地方……………(一四)

第七章 九州地方……………(一五)

第八章 北海道地方……………(一六)

第九章 樺太及び臺灣地方……………(一七)

樺太地方……………(一八)

臺灣地方……………(一九)

第十章 海外傳道……………(二〇)

海外傳道の發端……………(二一)

朝鮮傳道……………(二二)

滿洲傳道……………(二三)

# 歷史篇

第一章 緒言  
 第二章 天理教の成立  
 第三章 天理教の傳播  
 第四章 天理教の發展  
 第五章 天理教の海外傳播  
 第六章 天理教の未來  
 第七章 附錄  
 第八章 結語

## 附錄

### 結語 傳道の將來性

中華民國傳道	..... (一五)
北亞米利加傳道	..... (二六)
南洋傳道	..... (二七)
傳道の將來性	..... (二八)
本部直轄教會、設立年、歷代會長一覽	..... (三〇)
本教傳道に關する年譜表	..... (三〇)
天理教世界進出圖	..... (三一)
府縣傳道線一覽表	..... (三二)

第一章 初期傳道

天保九年十月廿六日、本教の立教以後教祖様には只管助け一條の途に着き給ふた。貧民を憐み、難澁を救ひ、施し與へるを常とされた。これがため地持ちと謳はれた中山家も追々逼塞するの止むなきに到つたため、家族の憂慮もあつたが教祖様の慈悲の心は底止するところを知らなかつた。

かくて、立教以後十五年の歲月は流れ嘉永六年の年を迎へた。この年、教祖様には残る母屋も賣り拂つて貧民に施し、當時十七歳の末女小寒様を大阪に遣して神名を傳へしめ給ふた。この頃の中山家は貧のどん底に落ち切り、灯すに油なく焚くに薪な

四  
く鼠一匹も姿を見せぬ有様であつたが、かゝる窮状の中にあつても教祖様の恵みは盡きる所を知らず「夏吊る蚊帳がなくとも助け一條は止むに止まれん」と仰せられた。而してこの頃より産屋疱瘡等の上に不思議なお助けが現はれ文久の頃に到つて助けられた御禮に中山家に参拜する者が漸く出て来るに到つた。これ實に天保九年の立教より數へて廿數年の後のこと、これより愈々我が教が大和ばかりでなく國々所々へと伸び出したのである。

先づ文久の御代には豊田村の中田義三郎、辻忠作等丹波市附近の者を初め、芝村、安堵村界限の信者は教祖様を生神様と慕ひて集り来るやうになつた。そして元治元年を迎へるや、大豆越村の山中忠七、新泉村の山澤良助、永原村の岡本重次郎、大西村の上田平治、樺本村の

飯降伊藏、伊豆七條村の榊井伊三郎、前栽村の村田幸右衛門等前後して入信し、樺枝、横田、古市、小林等の村々から續々参拜する者が増加し、大和一圓に神名は流布したのである。

この年、飯降伊藏は妻女を助けられたお禮として社を造り献納した旨申出でられ教祖様の命により勤場所を建築せられた。これ實に本教に於ける最初の詣り場所である。この上棟式の御祝に大豆越村山中忠七より招待され一行十數名出向く途中、神社の前で太鼓を鳴らして参拜せしめたため拘留されし事件あり、これがため一時遠のきし信者もあつたが、靈救は各所に起り、「萬病氣助けの神様」の名は遠近に聞え、慶應の御代に入り海知村の美並久五郎等新しき信者續々集り、大和一寒村庄屋敷村もこれがため賑ひを呈するに到つた。



こゝに於て近隣の神社佛閣よりの辯難攻撃漸く起り、教祖様の長男秀司先生には、慶應三年京都の吉田神祇管領家に出張し、布教公認の許可を得て來られたのである。

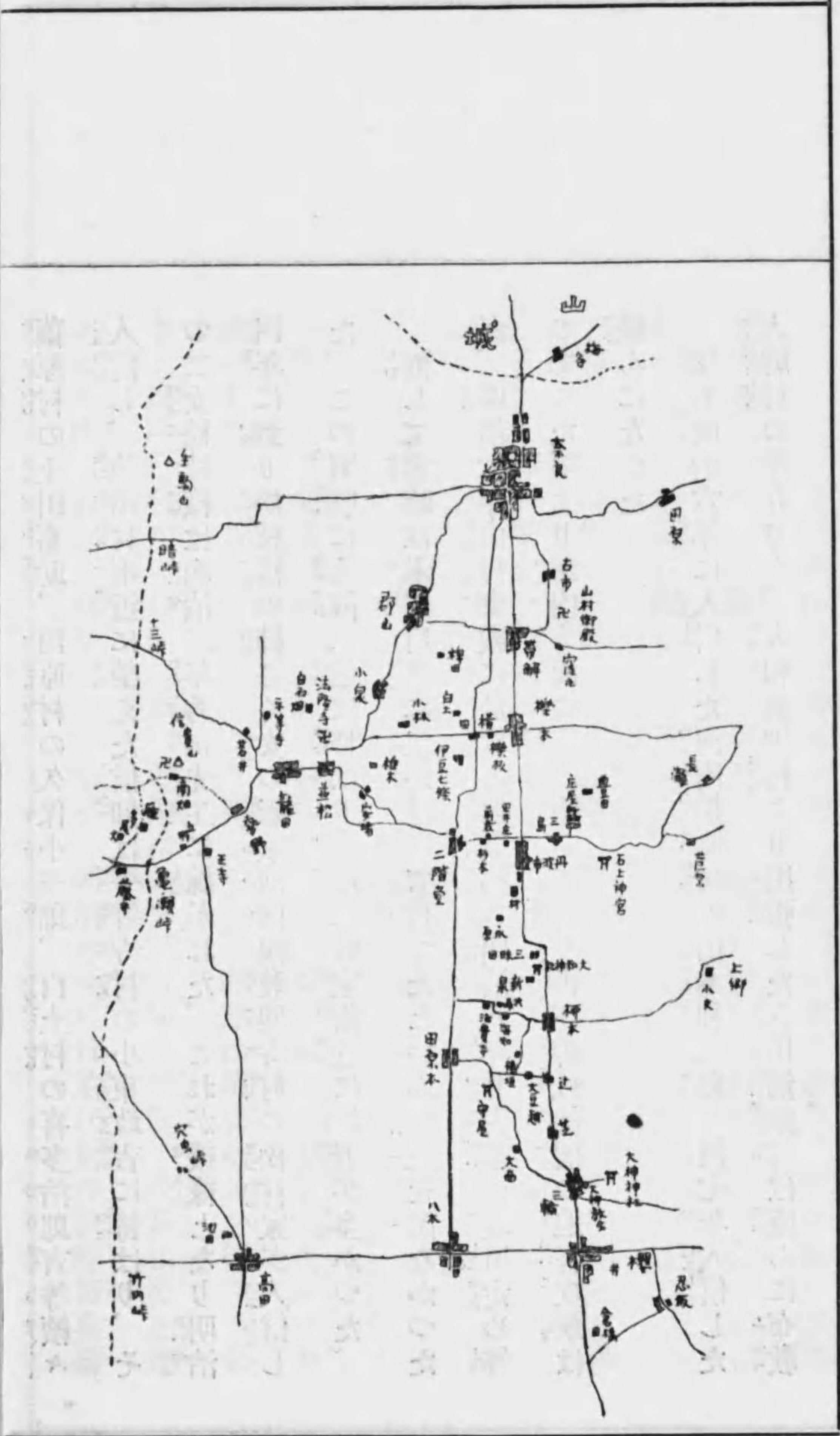
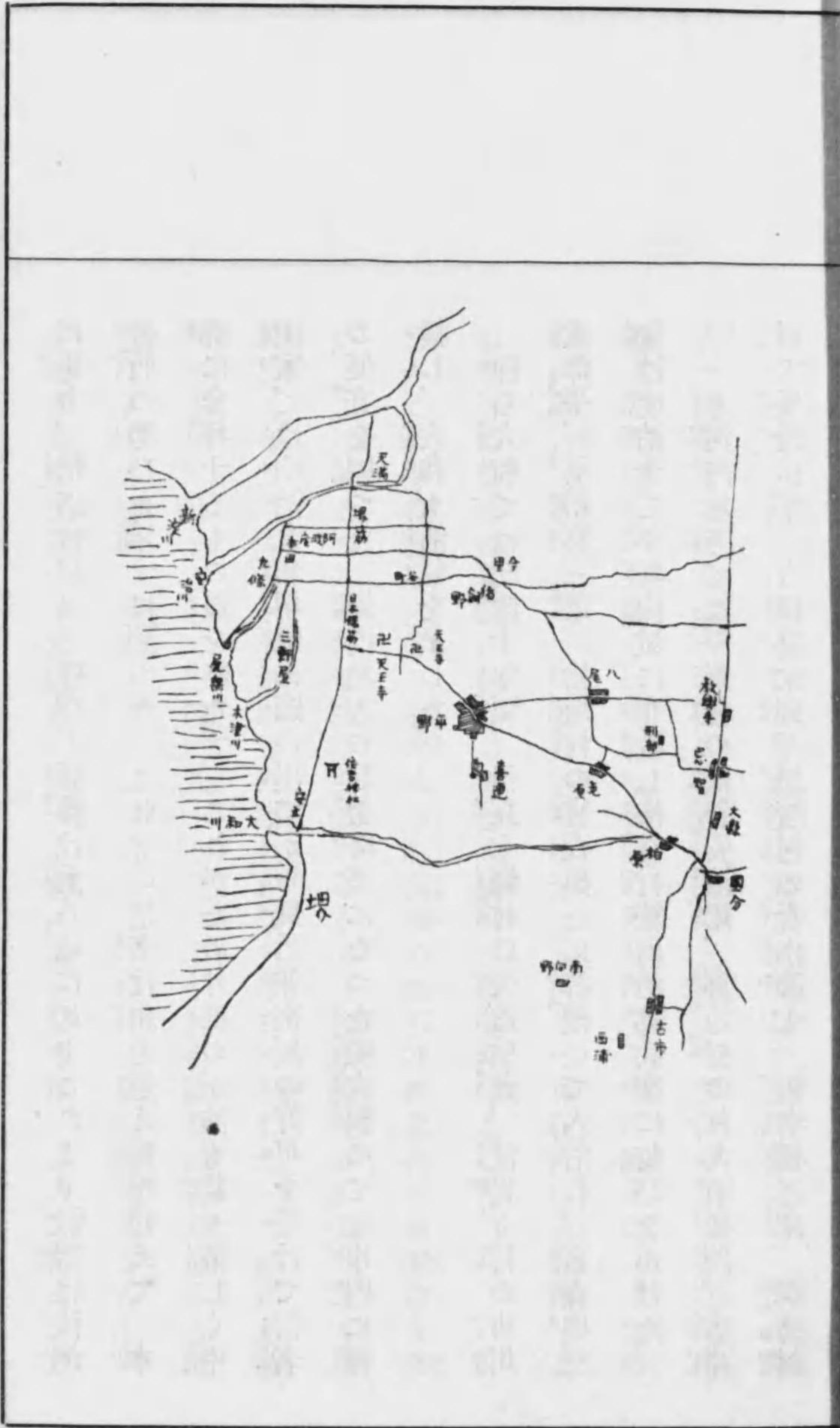
而してこの年の一月より八月に互つて教祖様には御かぐら歌をお示し下され御手振りの手をお教へになつた。

## 第二章 近畿傳道

明くれば慶應四年、幕府は倒れ年號も明治と變り、不思議な助けを頂くもの漸く多く、その喜びを頌たんとその熱意は親戚縁者を傳つて弘り、或は行商人の口から口へと傳はつて、近隣は勿論、生駒山脈を越えて河内大阪へと延びたのである。明治初年には若江村の松尾市兵衛

藪原村の上田嘉助、田原村の久保小三郎、白土村の喜多治郎吉等續々入信し、龍田村附近に榮えた信仰は平等寺村の小東政吉に傳はり、その二女松枝様は明治二年秀司先生に嫁がれた。これが機縁となり明治四年に到り松枝様の姉さく女の姻家河内國教興寺村の松村家が入信した。この頃既に大阪に道は傳はり河港三軒家附近に信者が多かつた。而して當時は未だ自然に道が延びて行つたといふ程度を出なかつたが、明治七年山村御殿に於ける取調べ、明治八年甘露臺の地所定め等のあつた頃より河内方面の道は盛んになり再び神社佛閣の迫害攻撃は盛んになつた。

即ち明治六年に入信した河内柏原村の山本利三郎、同七年入信した大縣村の増井りん、大和南畑村より出張した森田清藏等は盛んに布教



に廻り、信者は信者を呼び、靈救は到る處に起りこれより教勢は決河破竹の勢ひを示すに到つた。これ等の信者は山を越え野を越えて、本部に参拜するもの後を斷たず、これがため外部の干渉も益々激しく中山家では明治九年堺縣に願ひ出てから、風呂兼宿屋の許可を受けて信者の便宜を圖つた。河内地方の教勢隆盛になつた頃大阪にても市内に傳播し、大和も活氣を呈した。

即ち大和では明治十年頃、伊豆七條村の矢追櫓藏、法貴寺村の市川重郎平、前川喜三郎、檜垣村の宮森與三郎等續いて入信し、宮森與三郎は明治十二年頃山城に布教し梅谷村笹西治郎兵衛に匂ひをかけた。一方河内地方では平野村の紙谷安治郎、喜連村の林九右衛門、古市村の奥野伊平、吉田喜太郎、恩智村の森山嘉七、板倉槌三郎、飛鳥村

の浅野喜一郎、千代田村の藤本藤太郎、老原村の松田伊之助、高井嶺吉、國分村の乾兵藏、教興寺村の中谷勘三郎、刑部村の松田音次郎等續いて入信し、大阪では三軒家の他に松島に村上文治郎兄弟、空堀の泉田藤吉、本田通三丁目の井筒梅次郎等入信して布教に従事した。この頃既に京都にも道は傳はり七條大橋附近に盛んであつた。

かく教勢の發展に伴ひ信仰の中心大和のおちばに参拜する者愈々多く、これがため外部の干渉益々峻烈となり、教祖様及びお側の人々の苦勞も多く、拘留、取調べ等の事件が頻發するに到つた。これがため秀司先生には子として、既に八十餘歳の親、教祖様の御苦勞を見るに忍びず、又信者の難澁を思ひて明治十三年の夏、金剛山地福寺の配下となり轉輪王教會を組織し、迫害を遁れんとしたが、この教會は神意

に添はず間もなく廢止された。

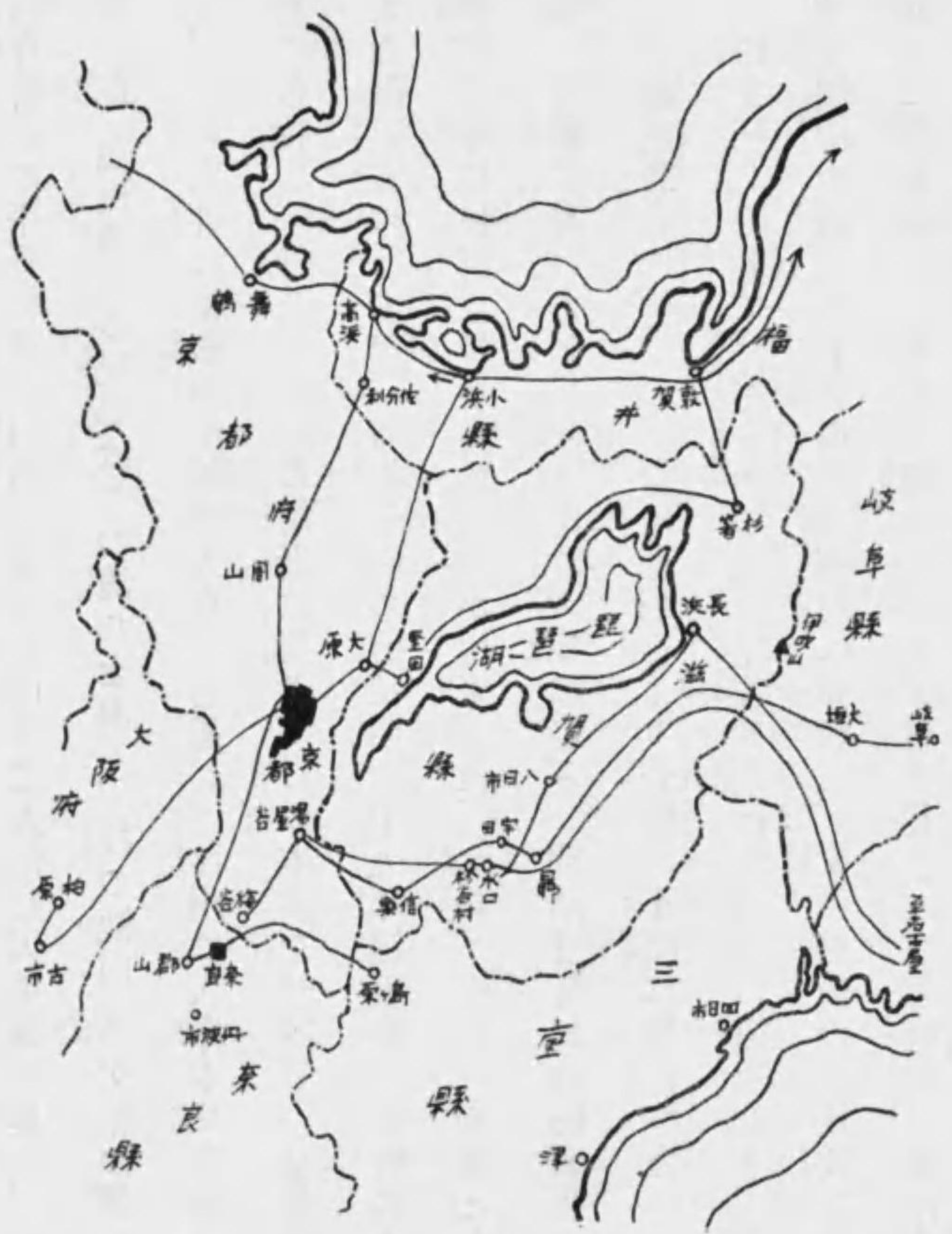
而して、この頃に到り信者はそれ〴〵講社を結成し互に信仰を勵み傳道に従事した。今、當時結成された主なる講元及びその講社の名を擧ぐれば、大阪は三軒家に博多藤次郎等の眞心組、松島に村上文治郎兄弟の天恵組一番及び二番、河内平野村に紙谷安治郎の平眞組、喜連村に林九右衛門の平眞組二番講、老原村に松田伊之助の神樂講、國分村に辻勘七の清心講、教興寺村に仲谷勘三郎の誠心組、大縣村に増井幾太郎の眞恵組、大和安堵村に飯田岩次郎の積善講、窪ノ庄村に森本重太郎の天元講、伊豆七條村に喜多治郎吉の誠心講、法貴寺村に市川重郎平の心實講、田原村に久保小三郎の明元講等である。次いで明治十四年には大阪薩摩堀に梅谷四郎兵衛の明心組、同本田通三丁目に井

筒梅次郎の眞明組が起り、同十五年頃には天恵組が發展して猪飼野に木村傳次郎の天恵三番、空堀に泉田藤吉の天恵四番、それより導かれ瓦町に小松駒吉氏の天恵五番、淀川筋に寺田半兵衛の天水組、天満に茨木元吉の天地組、松屋町の近藤政慶の守道講等續々結成された。

これ等の信者が續々參拜に來るため大阪からの沿道、平野、柏原、國分、藤井、龍田、二階堂に各講社の指定の宿が出来或は人力車の建場が出来、又、京都からの沿道、宇治、小倉、木津、奈良等に於ても同様の便宜が圖られ、明治十五年頃には本部前に通稱「重吉さん」「豆腐屋」の二軒の宿屋が建つた。一方本部では明治十四年夏甘露臺の石曳きがあり同十六年には雨乞ひ勤めが行はれ、信者の參拜跡を斷たず、地方に於ては信者は信仰に勇んで傳道に勵み、明治十四年大和倉橋村

の山田伊三郎入信し心勇講を結成して南大和の傳道にいそしみ、同年大阪眞明組の道は兵庫に伸び、明治十五年遠く遠州に傳はり、同年鴻田忠三郎は新潟に道を傳へ、歸郷後大和上之郷の山本藤四郎を導いた。また京都では明治十三年頃、西陣の人奥六兵衛は河内國古市村の親戚奥野伊平方にて山本利三郎の話を聞いて入信、歸郷後布教し明治十四年の終りには立川和助、富川久吉、深谷源次郎、澤田善助、宇野善助、萩原治兵衛等續いて入信するに到り、この年天倫社明誠組を組織し富ノ小路松原下ル立川和助方を寄所とした。その後明治十七年本部より許可を得て斯道會を組織し、改めて深谷源次郎が講元となつた。又、明治十六年入信した堺の平野辰次郎は朝日講、平井常七は神世組を起し、同十九年大阪釣鐘町の中西金次郎入信して恵心組を起し、

大和郡山の平野檜藏は河内より道を聞き入信し天龍講を起し、植田平一郎、萬田萬吉の兄弟はこの流れを汲み、後の池田、鳥ヶ原の講を結び、大和櫻井の富松檜治郎は大和講を起し、播州の人岸本又次郎は八木に布教し、丹波市附近の信者は集りて日の本講を結成し、京都に榮えた斯道會のうち第二番湯屋谷の道は明治十九年滋賀縣甲賀谷に入り、明治廿年には附近に多數の講社が出来、後、水口、甲賀、湖東となる。又、下鴨に伸びた道は漸次洛北大原に進み、明治廿年には滋賀縣堅田より越前敦賀に伸び、一つは鳥羽谷より若狭の小濱に傳はつた。これと時を同じうして京都白川の澤田重左衛門は天龍講の道を聞き、明治廿年周山を越えて若狭の佐分利村に布教し、又、丹後の舞鶴及び丹波地方に道を傳へ、大阪天地組の信者木村太兵衛は京都府船井郡に布教



した。

この頃、紀州尾呂志村の山田作次郎は大和下市の山田龜吉より噂を聞き、市木村の畑林爲七と共に参拜し、正明講を起し、その信者西初太郎、西松太郎はそれ／＼東愛、中紀を起す。五郷村の下村賢一郎は京都にて道を聞き、歸郷後同志の人と布教して正心講を起し、心勇講の加見兵四郎等は伊勢に布教し、又、甲賀系、中和系の布教師等續々伊勢に進出した。

### 第三章 教會本部の設立

慶應三年七月、教祖様の長男秀司先生が京都の吉田神祇管領家に出張して布教公認の許可を得られたが、御一新となるに及んで無効とな

り、迫害干渉は道の發展と共に激しくなつた。これがため教祖様の御苦勞多く、信者の參拜も自由に出來ざる有様となり、心ある人はこれが緩和を圖り、明治九年には堺縣の許可を得て蒸風呂兼宿屋の營業をなされ、同十三年には大和宇智郡栗野村金剛山地福寺の配下となつたが更に效果なく、干渉は日と共に激烈化したので益々布教公認の必要を感じ、明治十四年には大阪明心組の梅谷四郎兵衛は眞明組と、もに大阪阿彌陀池の和光寺を通じて運動を試みたが目的を達し得ず、同十五年尙も梅谷四郎兵衛は舊肥後藩士柴田某を通じて東京へ公認許可を出願せんとしたがこれも晝餅に歸した。越えて明治十七年に到り南區炭屋町居住の天惠組の信者竹内美與志は「天輪教會本部」設立を大阪市内の講元間に遊説し賛成を得、本部を動かし、「豆腐屋」村田長平方

を天輪教會創立事務所となし晝策したが翌十八年二月に到つて挫折した。この年五月神道本局に願ひ出た處公認許可はなかつたが部屬六等教會を許された。一方この前後に或は鴻田忠三郎が中心となり、或は大神教會の神官等が中心となつて大阪府に願ひ出たが共に却下となり、或は河内の名士を通じて願はんとしたが果さず、明治十九年に到つて神道本局から視察があり公認の許可あるまで大神教會の管理を受けることゝなつた。その後も引續き請願運動が續いたが、この頃、教祖様の御身上思はしからず、關係者は本部に引返して御願ひしたが、教祖様には明治廿年舊一月廿六日九十歳の高齡を以て御昇天になつた。教祖様御昇天の報は信者を驚愕慟哭せしめたが、信者は教祖様の御精神を體し尙ほ一層傳道に拍車を懸け、教勢は益々進展した。明治廿

一年舊一月廿六日、教祖様の一年祭が執行された折、祭典の中止を命ぜられし事情に鑑み愈々教會公認の必要を痛感し、關係者は種々協議を重ね、東京府へ出願の決心をなし、先づ諸井國三郎、清水與之助は三月中旬海路東京に出發し、續いて中山新治郎様、松村吉太郎、平野檜藏は四月一日に着京し、直ちに準備を整へ、稻葉神道管長の添書を以て、四月六日東京府へ出願、同月十日高崎知事より「書面願之趣聞届候事」と公認の許可を得、當時教會を下谷區北稻荷町四二番地に設け、同月廿四日開筵式を行つた。次いで同年七月教會本部を奈良縣山邊郡丹波市大字三島五番地に移し東京を出張所と改めた。

#### 第四章 中部地方

明治十五年三月入信した大和國檜垣村の鴻田忠三郎は同月新潟縣勸農場耕作係に任命され直ちに新潟市に赴き、齊悟清藏等數名の者に道を傳へて布教したが翌明治十六年正月本部より招喚されて歸和しその後遂に出張の機會がなかつた。

同じ明治十五年の末、大阪眞明組の道は遠州袋井在貫名村に傳はつた。その經路を尋ねるに、明治十三年の頃廣島縣人吉本八十次、大阪九條に眼病を患ふうち眞明組講元井筒梅次郎に助けられて入信し、その後仕事の上から關東に出かけ翌十五年秋なかば再び大阪へ歸る途次相州馬入川の畔にて遠州袋井在貫名村の諸井國三郎方手代安藤斌と知り合ひ連れ立つて諸井方に歸り滞在するうち、同年十二月同家傭人の急病を助け、神名を傳へて翌明治十六年正月（舊十二月）この地を去



つた。その翌月諸井國三郎は三女甲子疫病にかゝるに及んで神名を慕ひて参拜して歸つたが、三月に到つて本部より高井猶吉、宮森與三郎、大阪眞明組講元井筒梅次郎等出張し滞在一月餘ともに布教しこゝに遠州眞明組を結成した。その後この講社は附近一帯に布教して道を弘め、明治十八年の夏諸井國三郎は關東地方に布教し、一方信者は三河、駿河地方に伸び、明治廿三年には地頭村の永井藤平は千葉縣に布教し、又白羽村の小栗市十と共に伊豆下田に傳道し、この頃道は小田原に伸び、名古屋に傳はり、山梨縣、長野縣に進んだが、明治廿年に到つて遠州眞明組の道は俄然奥州傳道の華々しい火蓋を切つた。

遠州眞明組の道が名古屋に進んだ翌明治廿四年、濃尾の大震災あり、この時紀州より出張した正明講の西松太郎は以後名古屋に留まつて布

教に従事した。

また明治廿一年頃には斯道會の道は江州一圓に榮え、他系としては天地組三番の道が僅かにあるのみで、これら斯道會の信仰は所謂江州商人の背に乗つて或は東江州より伊吹山麓を通り、或は北伊勢より美濃、尾張に進み明治廿四年頃には名古屋に名稱を開き、新潟に向つた一方それより早く明治廿二年三雲より駿河に傳はつた。

以下これを詳述するに大體左の如くである。

即ち明治十九年江州甲賀郡杉谷村の寺井お松が洛異湯屋谷の斯道會二號西野清兵衛より眼病を助けられ、同廿年柏木村宇田の山田太右衛門が娘の病ひを助けられてより甲賀谷の信仰は榮え、明治廿二年巖峨の講元佐治登喜次郎は神崎郡八日市に布教して講社を弘め、山田太右

衛門は宇田を中心に布教し、甲賀谷一圓の信者は水口に集談所を置き、藤橋光治郎を講長として傳道に従事した。これが現在の湖東、甲賀、水口の道の初りであるが、明治廿一年當時草津鐵道開設のため三雲に働いてゐた駿河國大岡村の鈴木半次郎は息子平作の病を三雲の講社井上佐平に助けられ、翌二十二年駿河に歸つて布教した。この頃信仰は漸次活潑に前進し、曩に八日市に布教した佐治登喜次郎の信者は附近一帯に出來、そのうち角井村池ノ尻講社の周旋堤丑松は行商の道すがら九州筑紫に道を傳へ、この年同講社の講元小林喜平次は彦根の中村藤次に、中村藤次の信者中村又吉は長濱の西島與作に道を傳へて、それより講社を結成し、長濱講社の信仰は尾張國中島郡西島村に傳はり、それより名古屋の日比野辰彦、近藤嘉七等に傳はつたのであるが、近

藤嘉七は元新潟縣の人にて信仰を新潟在住の弟近藤徳藏に傳へ、これより尙道は奥州へ伸びたのである。

これと平行して柏木村宇田の山田太右衛門を中心とする道も湖南一圓を席卷して弘り、各地に講社が出來たが、これらの信仰もまた行商人の背に乗つて遠隔地方へ伸びて行つた。即ち明治廿一年頃愛知郡豊椋村大清水の高田彦兵衛は行商の傍ら柏木村の岡田源七より道の話聞き、速水重左衛門と共に入信して清水講社を起し附近に布教したが、その話を聞いた同村の速水久次良は廿三年栃木縣日光町に布教し、廿二年に入信した中野村の小梶與兵衛は附近一帯に布教した。その信仰は揖斐川上流の山を越えて美濃に入り川を下つて桑名に傳はり、それより又、尾張から美濃に入つて布教するものあり美濃尾張に大きな道

を流した。この頃また日野の布教師森田某は大垣に入り藤江銚之丞に道を傳へ、この道はまた奥州へ流れて行つた。

一方北陸地方の道は既に明治廿年初つてゐた。即ち若狭國佐分利村に入つた天龍講は、佐分利村三森の岩崎源右衛門等の傳道によつて高濱に進み、尙も海岸に沿ふて西に東に伸び、西は舞鶴より中國に向ひ、東は小濱に出て若狭一圓を風靡したが、傳道者達は尙も海岸線に沿ふて福井、三國、金澤、新潟へと傳道に従事した。

又、明治廿年江州堅田より杉箸村を通つて敦賀の高橋直秀に傳はつた道は天龍講の道と殆んど競走の形で北陸道を布教に進出した。

斯道會、天龍講の道が流れ／＼て越後平野へ入つた頃は中部地方一帯に前述各系統の道が浸潤し、何れも活氣を呈し、明治廿七、八年頃

越後蒲原地方に傳道の渦を巻き起した。

## 第五章 中國四國地方（兵庫縣及丹波を含む）

明治十二年頃、長州出身の船頭土佐卯之助は大阪三軒屋にて眞心組の道を聞き、北海道へ航海するうち遠く小樽に道を傳へしことあり、後婚家四國の撫養に歸りて傳道に従事した。

この頃大阪本田通三丁目の井筒梅次郎を中心とする信仰は近隣に弘り、明治十三年大阪西區鍋屋組横町の立花善吉も亦助けられて入信し、越えて明治十四年兵庫縣今在家町の魚田やすは立花善吉から兒女の眼病を助けられて入信した。次いで上田藤吉も腰痛を助けられるなど今在家町附近に信者追々増加し、これがため立花善吉は兵庫縣に出張し

て布教を始め、大阪眞明組結成後間もなく同年舊六月上田藤吉を講元とする兵庫眞明組（後兵庫眞明組第一番と稱す）が誕生したが、後幾何もなく衰滅した。その後、同和田岬町唄小富士を基として再び信仰に入るもの續出し、明治十五年舊八月新に天輪王眞明講社（後兵庫眞明組第二番と稱す）を講元端田久吉、講脇北野熊次郎、富田傳次郎外十五戸を以て結成した。その後本講社は急速に攝津、播磨、丹波、但馬地方に傳播し、當時三宮町に居住してゐた清水與之助は明治十六年五月に、元町の増野正兵衛は同十七年二月入信し、同十九年一月初めて兵神眞明講と改稱した。

これと前後して眞明組の道は明治十五年當時大阪に大工職を營んでゐた阿波麻植郡森山村山路の野村辰太に傳はり、それより郷里の甥野

村京太に入り、野村京太は母と共に附近に匂ひをかけた。その頃妻の産後の思ひに惱んでゐた徳島在高崎の正木國藏は明治十六年の末野村を訪ねて道を聞いて入信した。

この年但馬地方一帯は藍の不作となり、同地方の紺屋は藍の原料を四國徳島の藍問屋に求めた。偶々その藍問屋の手代であつた正木國藏は但馬に出張し、商用の傍ら温泉町湯村の紺屋木岡儀八郎、丹土の田淵廣七に道を傳へ、越えて明治十八年には姫路の紺屋紺谷久平、網干の紺屋岡部吉右衛門を導いた。然し正木國藏は生國が阿波なるため播但の信者を修理するを得ず、紺谷久平、岡部吉右衛門は兵庫眞明講社に入り飾磨眞明講社を作り紺谷久平が講元となつた。又、照來村丹土の田淵廣七は大阪天地組の出張を乞ふた。これがため天地組からは明

治十九年三月同國但馬出身の信者衣川彌兵衛を送つたがこの時梁瀬村の田川寅吉を導いた。その後、湯村の木岡儀八郎も天地組部屬となり、明治廿年頃には同じ天地組の木村太兵衛の信仰は弟金山梅藏に傳はり、次いで丹波船井郡の樋口幾太郎、多氣郡磨氣村の小林豊藏に及んだ。

これら天地組の信仰は大阪に發し、明治廿年頃より同廿五年頃にかけて武田平吉は神戸に、廣岡藤吉は播州龍野町に、神澤瀧藏は播州三木より進んで岡山に出て、伊藤半七は藝州尾道に、井上政次郎は瀬戸内海の小豆島に布教した。又、當時大阪在住の中川徳藏は郷里伊賀の名張に歸つてこの講社の信仰を傳へた。

これより先、明治十三年天惠組の信仰を享けた大阪天王寺區谷町の上原佐助は後眞明組の部屬となり明治十八年東京布教に乗り出し、翌

十九年上原の妻さと(離婚後川合豊)は岡山縣笠岡に歸りて布教し、附近一帯に講社を弘め、明治廿四年その信者岡崎軍治は商用の傍ら島根縣本庄村門脇清太郎に道を傳へた。

四國に於ては明治廿年頃阿波の土佐卯之助、正木國藏及び同じく大阪より道を傳へた曾我元吉等大いに傳道に従事し、明治廿一年徳島の柏原友吉は土佐卯之助の教話に感じて入信し正木國藏と共に布教し、阿波の道は早くも讃岐に伸びたが、明治廿六年には柏原友吉は信者三浦文平、吉川太郎等六名を長州に送つて布教に従事せしめた。

この頃、泉州堺の朝日組講元平野辰次郎は阿波海部郡日和佐町に布教して寺島實三郎を導いた。

又、明治廿年頃大阪眞明組講社のうち堀江講元葎内與平の信仰は當

時大阪在住の土佐國高知在久枝村の島村菊太郎、和食村の都筑武治の二人に傳はり、二人は前後して高知に歸り布教に専念し土佐一國を席卷し、進んで伊豫に伸び、豊豫海峽を越えて九州日向に傳はり、一つは遠く島根縣濱田方面に傳はつた。

以上の系統の傳道がかく熾烈になつた頃、これらの傳道者と共に丹後の天龍講の信仰は山陰道を西に進み、桑原喜太郎は長州山口附近に道を伸ばし、堺の朝日講、大阪の大廣講も山陽道を西に下り、東京眞明組の信者は伊豫に飛び、恵心組の信者も亦佐田岬に布教した。

これよりやゝ遅れて越前敦賀の布教師佐藤榮佐は明治廿九年、瀬戸内海の本島に布教し、大熊こま、片山好造の姉弟等を導いたが、この道は朝鮮に伸び本教海外傳道に大きな役割を演じた。

## 第六章 九州地方

大阪の石工北田常吉は熊本縣病院の石垣修理のため明治十八年四月中旬熊本へ出張した。彼は既にこの道の信仰を享けてゐたので仕事の傍らお助けに廻り、當時熊本鎮臺出入りの米商友井常八の腰痛を救ふたが、幾何もなくして大阪に歸つた。信仰の指導者を失つた友井常八は、北田が歸る時教へられた大阪の講元、天惠四番の泉田藤吉に書を送つて布教者の派遣を懇請した。こゝに於て泉田藤吉は種々派遣布教師を物色したが思はしからず、明治廿一年に到つて大和天龍講の信者井村徳次郎を送つた。井村は熊本にとゞまつて布教に従事したため、堤豊賀、中村しう、山内治三郎等入信する者が多かつたが、間もなく

井村もこの地を去つた。それより堤豊賀は講元となつて傳道に勤めたが、山内治三郎は大阪に出て、恵心組講元中西金次郎に面會し、布教師の派遣を願つたので、明治廿四年同講々社安原瀬亮を送つた。安原は間もなく天龍講の信者と別れ、大阪より來援した茶木谷與兵衛とも同縣下に布教した。この頃、堤豊賀、山内治三郎をそれ〴〵講元とする天龍講の信仰は各地に伸びた。

これよりやゝ遅れて明治廿八年、大和誠心講の矢追楯藏は熊本市外二本木村高橋卯治郎を尋ねて布教し、進んで矢追、高橋の兩人は長崎に出て道を弘めた。

明治廿三年、天恵四番講元泉田藤吉はつてを得て豊前中津町に進出して布教し、苦勞の結果信心の道を傳へた。その間、一日宇佐神宮に

參拜の折、同地の宇都宮右源太は教理を聞いて入信した。かくて此の道は豊前より進んで北九州に入った。

北九州では同じく明治廿四年の初夏、江州八日市在池ノ尻講社の周旋堤丑松が行商の途次福岡縣直方町に滞在するうち、湯屋井上てんの次男を助け、教理を傳へたが、奇蹟は八方に擴がり、同町の福原惣太郎、木屋瀬の松尾徳之助、上津役の能美賢一郎等續いて入信し盛んに布教した。

この頃、阿波眞心組の天満益右衛門は佐賀に、大和心勇講の森川いは女の身を以て單身この地に布教し、大阪眞明組では澤田宮次郎の島原布教を始めとして多數傳道に出張して鹿兒島に進んだが、鹿兒島では紀州正明講の道が伸び、日向へは土佐眞明組が入り、全九州の道

は榮え、やゝ遅れて天龍講、大阪眞明組、大和心實講の道は沖繩滝美大島等の諸島に傳はつた。

### 第七章 關東地方

明治十八年二月、埼玉縣大里郡幡羅村の江原代三郎外十五名は伊勢參宮を終へて大和見物の途次、本部に參拜し御守を頂いて歸つたが、偶々その取次に出た遠州眞明組講元諸井國三郎はこれらの人と知り合ひ、同年四月關東地方の布教を志して出張し、先づ東京に出て、埼玉縣に赴き、鹿島、香取の邊から野州日光、更に上州高崎より太田、佐野邊まで實に百数十里の旅を續けて遠州へ歸つた。この間實に数十日、具さに辛酸をなめ囊中厘毛もなく、爲に食せざる日も幾日となくあつた。

その後明治廿三年頃より講元の志を繼いで永井藤平は千葉縣夷隅郡に、また神奈川縣足柄郡に布教するものあり、その他多數の傳道者は關東に布教した。

遠州眞明組の傳道に少し遅れて、明治十八年七月、大阪眞明組の上原佐助は東京に出て布教を開始した。上原佐助は元岡山縣笠岡の人、若き時大阪日本橋筋の疊表商上原家の養子となり事業を受繼いだすが時に利なく、明治十五年の頃、天惠五番の信者安藤駒吉に匂ひかけられ講元小松駒吉の話聞いて入信、天惠二番の講元となつたこともあつたが、後眞明組部屬となり、明治十八年七月手代椿卯之助を連れ、知人清水茂平を頼つて上京したものである。始め下谷區金杉町にて布教



し、明治廿年同區龍泉寺町の大音寺前に移轉、教會本部が大和に移轉して後は現在の稻荷町に教會を立てた。金杉町にをりし時より追々信者増加してこの信仰は早くも市内に傳播し、下谷講社、淺草講社、日京講社、三河島講社、小石川講社、芝講社、深川の眞實講等各地に分講社が出来、それ〴〵他府縣にまで傳道し殷賑を呈した。後、明治廿六年日京講社の信者中臺勘藏は本部直轄の取扱を受けた。

この頃、但馬湯村天地組六番木岡儀八郎の信者岸本加賀美は東京、埼玉地方に布教して多數の信者を導いてゐたが、大阪の人上田善兵衛が講元となり天地組一番を名乗つた。後、久保治三郎がこの信仰を統率した。

又、明治廿三年頃、江州柏木村の信仰は流れてこの地に傳はつた。

即ち滋賀縣愛知郡豊棕村字清水の速水久次郎は、清水講社の高田彦兵衛より道聞き、明治廿三年十一月一家を擧げて關東傳道に向ひ、入信前の商用關係を頼つて栃木縣日光に留つて布教に従事し關東に道を伸ばした。

この頃、埼玉縣秩父町に滋賀縣人小林友吉といふ者あり、この人の知人滋賀縣神崎郡の瓦職小林善次訪ね來て道を傳へ御かぐら本を残して去つた。同町の新井久之助は偶々この本の教理に感じ、小林が傳へた講元山田太右衛門に教師派遣を願つた。こゝに於て柏木六左衛門他數名出張して教理を説き、講を結ぶことゝなつたが、この道は又遠く各地へ伸びた。

以上の道が活潑に活動を始めた頃には、この他の傳道者は東京を中

心としてこの地方の布教に乗り出した。

明治卅年十一月、大阪南分教會の信者丹波國船井郡東梅本村赤熊の中川與志は單身東京傳道に乗り出し幾多の辛酸を嘗めつゝも助け一條に従事した。この捨身の信仰はその後全國各地に流れて榮えてゐる。

## 第八章 奥羽地方

明治廿六年六月、静岡縣榛原郡白羽村白羽支教會の信者二藤藤一郎は東北布教を志して單身この地に進出した。先づ東北地方の門戶福島に滞在して附近に傳道したが、この地方は當時本教傳道上の處女地にて大いに期待されるに鑑み、白羽支教會長小栗市十の出張を乞ふた。小栗は出張後共に布教する一方各地を順次巡視し、この地の廣漠たる

に驚嘆し、直ちに歸郷して山名分教會長諸井國三郎に委細を報告し傳道の重要性を強調した。こゝに於て「奥州布教」の議は定まり、同年九月末頃より同教會部内各所から續々布教師を派遣することとなり、福島に奥羽六縣布教取締所を設け、布教師はこゝにて布教の相談を受け、八方へ擴がりこの道を傳へた。

即ち、二藤藤一郎、増田萬次郎、大石倉吉等は福島を中心に安達、信夫、伊達、相馬の各郡下をお助けに廻り宮城縣に迄出たが、後増田は山形縣鶴岡へ、大石は米澤へ布教の手を伸ばした。續いて福島半七、藤田志賀藏も出かけ、松本房吉、米山小六は酒田に出た。加茂孝一郎は秋田縣大曲町に、坂部某は横手町より湯澤に布教を開始、中山嘉十、關喜太郎、岡野勘藏等は次々に福島縣平町に布教した。又、加茂清作

は仙臺に、山田善作は宮城縣志田郡に、末長寅吉、室内健吉、續いて名倉千代藏、加藤孫市等は岩手縣盛岡に、平賀治三郎は宮城縣石巻より岩手縣一ノ關に、それ〴〵布教し、名倉は青森縣小湊に進み、小湊の信者工藤佐太郎、太田丹五郎は弘前に布教し、更に五所河原、浪岡に行き、寺田某は八戸へ教線を伸ばした。

かくて遠州眞明組の奥州布教は燎原の火の如く擴がり布教後一ヶ年餘の明治廿八年には既に二十ヶ所の教會出願を見、進んで北海道へ向つた。

この頃、三重縣島ヶ原の天龍講島ヶ原講社の中森芳一は福島の布教取締所の手引にて山縣に布教し各地に道を進めた。

又、明治廿九年四月、滋賀縣愛知郡西小椋村の菱川善次は早くより

斯道會湖東講社の信者となつてゐたが、この年長男の身上から驟然悟る所あり、郷里を後に傳道の旅に上り、東京、房總地方を遍歴し陸中黒澤尻から秋田縣の横手に出て、更に進んで能代に足をとめて傳道に従事した。

これと前後して湖東講社の道は名古屋より新潟市に移り、越後平野を席卷し、金森某等は山形縣米澤に布教し、縣内各地に傳播するに到つた。

かく各地方の傳道者が困苦缺乏の中にあつて只管お助けに奔走してゐた頃、秋田縣六郷町在の小西某は易學太占の修業を志して東京に出て、師の門を敲いたが、時に師既に老衰し教授することを得ず、高弟岐阜縣大垣在住の藤江鉉之丞を訪ねるべく教へた。こゝに於て小西は

大垣の藤江を訪ねたが、藤江は夙にこの道に感じ教會を起して傳道に奔走してゐた。藤江より諄々と説き聞かされた教理に小西はいたく感じて入信し直ちに郷里へ歸つて布教したが、後大垣より宇野猶人が出張して道を弘めた。

かくて數年前まで傳道上未開の地であつた奥羽六縣に道は榮えたが、この他、水口、東、中和等の傳道者達は續々傳道に出張して教線を張つた。

## 第九章 北海道

北海道の傳道は教祖様御昇天後、明治廿二三年の頃より追々盛んになつてゐる。この地は元本州各地からの移住者によつて市町村の發達

を見た關係上、傳道者はそれ／＼姻戚知人を頼つて進出した、め殆んど各系統の教會が設立されてゐる。

然し、この地方の傳道はそれより早く、明治十三年頃、當時大阪眞心組の信者河内福藏、土佐卯之助等により夙に傳道されてゐた。二人は共に船頭にて北海道通ひの所謂北前船に乗り組み、大阪より瀬戸内海を通り、馬關海峡を越えて日本海に出て一路北海道小樽に通つたのであるが、海路種々の奇蹟あり、船員は勿論、その話を傳へ聞いた小樽の人も入信した。後北前船による舟運衰へるや、大阪からの傳道は一時中止となつた。

その後、明治三十年頃淡路洲本の天一講信者山本初右衛門は單身北海道布教を志して出發したが旅費足らず、一旦宇都宮附近に下車して

布教しそれより初志を貫ねて北海道鶴川驛に下り、神館を背に驛頭に立つてゐた處、驛前の飲食店主山本鹿藏と邂逅した。この人は曩に土佐卯之助の導きによりこの道に入つた信者で長年信仰に渴仰してゐたところ偶々傳道者山本初右衛門に邂逅したのである。こゝに於て共々布教して道を弘めた。

これより先、明治廿二年七月、紀州熊野川の上流大和十津川地方に大洪水あり、水害を蒙つて耕地を失つた沿岸の住民は新しき土を求めて北海道樺戸郡に移住して新十津川村を建設した。この移住者には既に紀州正明講の信仰が傳へられてをつたので彼等と共に信仰もこの地に移り附近に傳道せられた。

この頃姻戚關係を頼つて布教するもの追々増加し、天地組六番の信

者西村八三吉は札幌に、天地組十五番の後藤榮七は石狩に布教した。伊勢の人元東海分教會役員山本長藏も札幌に布教した。

又、遠州眞明組の信仰は明治廿六年より奥羽六縣に弘り、それより津輕海峽を越えて函館に渡り鈴木五郎はこゝに單獨布教を始め、岡部由松は山越郡八雲に布教するなど漸次各地に進出した。

この頃、兵神、郡山、水口、甲賀等の各布教師は前後相次いで傳道に従事して道内各國各郡に行き互つたが、尙進出の餘地は内地の比ではない。

次いで樺太へは日露戰爭直後斯道會等より伸びてゐるが目下樺太の門戸である大泊町に十ヶ所、豊原町に八ヶ所、眞岡、留多加町に各四ヶ所の設置を見る外、H形に南北に延びてゐる鐵道を傳ふて國境に近

い地點にも散在して現在四十二ヶ所の教會が設けられ、傳道者は交々入り込んで移住者を待ち迎へてゐる狀況である。

### 第十章 各教會の設立

教會本部設置の公認は信者に非常な感激を與へ、前述の如く十數年にして教線は日本全國に擴がり不思議な助けが隨時隨所に續出したが教會本部設置と、もに天理教會規約が制定され部下教會の設立が認められる事となつた、め各地に於ける部下教會が設置され、教勢に應じて分教會、支教會、出張所、布教事務取扱所の名稱を受けた。今、明治卅年までに設置された教會のうち現在本部直轄教會となれるもの、年代を掲げると左の如くである。

明治廿一年		(當時の會長)		(設立前の講名)	
山名分教會	諸井國三郎	遠州眞明組			
郡山分教會	平野 楯 藏	天 龍 講			
明治廿二年					
兵神分教會	清水與之助	兵神眞明講			
船場分教會	梅谷四郎兵衛	明 心 組			
芦津分教會	井筒梅次郎	眞 明 組			
高安分教會	松村吉太郎	光 道 講			
河原町分教會	深谷源次郎	斯 道 會			
東 分教會	上原 佐助	東京眞明組			

甲賀支教會	山田 太右衛門	斯 道 會
撫養支教會	土佐卯之助	阿波真心組
島ヶ原支教會	萬 田 萬 吉	天龍講島ヶ原講社
日本橋支教會	中 台 勘 藏	東京眞明組ノ内
明治廿三年		
城島分教會	上村吉三郎	心 勇 講
志紀分教會 (現在の中河)	山本利三郎 板倉槌三郎	天神講外十數講
田原支教會	久保小三郎	明 元 講
益津支教會	小栗 周 藏	遠州眞明組ノ内
堺 支教會	平野辰次郎	朝 日 講

飾東支教會	紺 谷 久 平	兵庫眞明講飾磨講社
明治廿四年		
梅谷分教會	笹西治郎兵衛	永 信 講
北 分教會	茨 木 基 敬	天 地 組
高知分教會	島村菊太郎	土佐眞明組
網島分教會	寺田半兵衛	天 水 組
中和支教會	植田平一郎	天龍講池田講社
南海支教會	山田作次郎	正 明 組
日和佐支教會	平野辰次郎	朝 日 講
越乃國支教會	宇 野 善 助	斯 道 會
湖東支教會	佐治正隆	斯 道 會

笠岡支教會	河合 豊	眞明組
御津支教會	小松 駒吉	天惠五番

明治廿五年

大縣支教會	增井幾太郎	眞榮講 光道會第三號
奈良支教會	森本重太郎	天元講
城法支教會	市川 榮吉	心實講
泉支教會	平井常七	神世講
平安支教會	飯田岩次郎	積善講
南紀支教會	下村賢一郎	正心講
名東支教會	正木 國藏	阿波眞心組ノ内
中紀支教會	西松太郎	正明講ノ内

西支教會	高田邦三郎	眞心組
府内支教會	樋口幾太郎	天地組十五番
青野原支教會	廣岡 藤吉	天地組十二番
生野支教會	田川 寅吉	天地組九番
豊岡支教會	木岡儀八郎	天地組六番
岡山支教會	神澤 瀧藏	天地組十四番
名張支教會	中川 徳藏	天地組ノ内
水口支教會	藤橋光治郎	斯道會
日光支教會	速水岩吉	斯道會
和爾布教事務取扱所	富森竹松	天元講
熱田布教事務取扱所	西初太郎	正明講



宇佐布教事務取扱所

宇都宮右源太

天恵四番ノ内

明治廿六年

細川支教會

武田平吉

天地組ノ内

尾道支教會

有田政七

天地組二十五番分講

上之郷支教會

山本藤四郎

心實講ノ内

上町支教會

近藤政慶

守道講

櫻井支教會

富松檜次郎

大和講

筑紫支教會

能美賢一郎

斯道會

八木布教事務取扱所

岸本又次郎

天明講

中津布教事務取扱所

今村熊太郎

天恵四番中津講社

義王布教事務取扱所  
(現在の琵琶)

石塚松次郎

治道布教事務取扱所

矢追檜藏

誠心講

高宮出張所

三好辰五郎

天龍講ノ内

明治廿七年

栗太支教會

木村常次郎

天地組三番

吉備出張所

南濱喜平

真心組ノ内

明治廿八年

旭日支教會

岡本善六

日の本講

淀支教會

金山梅藏

天地組七番

新潟支教會

池田四良平

鴻明講

東平野布教所

今村熊太郎

天恵四番

(現在の豊繁)

都野布教所  
直入布教所

梅田信吉

天恵四番ノ内

明治廿九年

麴町支教會

上田善兵衛

天地組一番

この他各地に系統を追ふて部屬教會を設置されたことは勿論であるが、教祖様御昇天當時信者二十餘萬といはれてゐたが明治卅年頃には信者二百萬と社會から見られるに到つたことより考へてこの約十年間に於て素晴しき發展を遂げたのであり、全國に道の流れてない縣はなかつた。今、三十年頃までの直轄教會以外の各縣内に於ける主なる設置教會を年代順に挙げれば左の如し。

明治廿三年

千葉縣 夷隅分 (山名)

福井縣 北陸分 (郡山)

明治廿四年

三重縣 錦生支 (敷島)

愛知縣 愛知分 (名京)

愛媛縣 愛媛支 (東)

明治廿五年

岐阜縣 大垣分 (河原町)

茨城縣 相馬分 (東)

埼玉縣 大澤分 (東)

石川縣 金澤支 (郡山)

廣島縣 竹原分 (北)

明治廿六年

鳥取縣 鳥取分 (豊岡)

長崎縣 佐世保支 (名京)

神奈川縣 足柄支 (山名)

北海道 新十津川支 (南海)

山口縣 萩支 (奈良)

山梨縣 甲府分 (名京)

長野縣 伊那分 (名 京)

明治廿七年

香川縣 香川分 (撫 養)

熊本縣 熊本分 (郡 山)

富山縣 高岡分 (郡 山)

福島縣 磐城平分 (山 名)

鹿兒島縣 始良支 (芦 津)

島根縣 濱田分 (高 知)

山形縣 鶴岡支 (山 名)

宮城縣 仙臺支 (山 名)

明治廿八年

青森縣 小湊宣 (山 名)

岩手縣 盛岡支 (山 名)

佐賀縣 佐賀支 (郡 山)

宮崎縣 宮崎宣 (高 知)

明治廿九年

秋田縣 平鹿宣 (山 名)

### 第十一章 一派獨立

かく教勢が發展した明治廿九年三月九日(舊一月廿五日)教祖様十年祭が執行され參詣の信者十萬を超え、世間の耳目を驚かしたが、翌四月六日内務省の祕密訓令が發せられ、各地の新聞雜誌は筆を揃へ罵詈讕謗を加へた。而して教會本部では當局の指示に従ひ若干その形式を改め、信者はその中を黙々としてお助けに従事した。一方明治三十年に到り本部關係の飯田岩次郎、及び前川菊太郎、橋本清の反逆事件相次いで起り本教にとつて内憂外患の大節であつた。

越えて明治卅二年、神道本局新管長稻葉正善氏の勸告により、協議の結果愈々一派獨立の請願にかゝる事となり、同年八月準備を整へて

時の内務大臣に宛て請願書を呈出し、内部に於ては翌三十三年四月より天理教校を開校して教師の養成を圖り、種々内部を整頓して内務省よりの沙汰を待つたが、同年十月書類不備のため却下となつた。

次いで明治三十四年六月、第二回請願書を出し、翌三十五年七月教會所取締條規を制定し全國を十教區に分つて取締るなど着々整備するところあつたが同願書も教義に關する書類不備のため翌三十六年一月取下げとなつた。

この不備を補ふため教典を編纂し、講習會を開いてこれを普及し、千四百餘名の教師を淘汰し明治三十七年八月第三回の請願書を呈出した。この度は書類完備せるも實行して後願出る様との内意あり、同月取下げとなつた。

第四回の請願書は同年十二月提出され、宗教局より翌年六月松村獨立委員呼出されて種々取調べあり、宗教局より許可を受けるまでになつたが同年十二月青森縣下に金平糖事件起り遂に取下げの止むなきに到つた。

この間、教勢は益々進展し海外傳道が開始され教會數二千餘ヶ所、教師數二萬餘、信徒約三百萬の多きに達し、明治三十九年一月に執行された教祖様二十年祭には本部附近は人を以て埋まるばかりの盛觀であつた。而して翌明治四十年六月九日本席様御歸幽になり一時暗雲低迷の觀があつたが、教信徒は尙も心を定めて教勢發展に勤め、同年各所に教會組合事務所が設けられ、翌四十一年には天理中學校が設立された。

この實狀を以て明治四十一年三月第五回の請願書を呈出した處、この度は閣議を経て同年十一月二十七日内務大臣平田東助氏より一派獨立を許可せられ「天理教教會本部」と改められたのである。

續いて翌廿八日附を以て教會本部所在地に天理教教廳を設置し、中山新次郎様が天理教管長に就職するの件が許可せられ、卅日、部下教會一般に對し名稱改稱（この時一般教會は大教會、教會、分教會、支教會、宣教所の五階級に分けられる）の通達が發せられ、一般教師には改めて本教より辭令が交附せられ、翌十二月一日、天理教教規及び規程が制定された。

明けて明治四十二年二月十九日朝野の貴紳を招待して獨立奉告祭が執行された。この年六月以降、本部及び各地に講習會を開催して爾後

の方針を明示し、翌四十三年一月に天理教婦人會が創立され、同四月天理教養徳院が開かれ、同八月従來の教會組合規程を廢し教務支廳規程を定め、九月、十四ヶ所の教務支廳が設置された。

## 第十二章 神殿建築と海外傳道

教會本部に於て一派獨立の運動が開始された前後より部下教會に於て海外布教の氣運起り、明治卅年七月山名分教會長諸井國三郎は率先して新領土臺灣布教に乗り出し、臺中、臺北、臺南に教會を設置し、明治卅三年臺中から高室清助等中華民國廈門に出進して布教を開始し同三十九年に教會を設置した。

この頃、撫養支教會の布教者は韓國釜山に傳道し、明治卅六年に到

り香川縣本島の片山好造、大熊こまの姉弟は京城に出て、布教を開始し、これよりこの地方の道は滿洲及び中華民國に伸びた。

この頃、青年布教者の間には所謂海外傳道熱盛んにして船場大教會では一躍英京ロンドン布教を敢行した。

滿洲傳道に出進したのは明治卅八年當時中津支教會の信者高部直太郎が安東縣に於て布教したのを始めとし、長崎、廣島地方より續々傳道者が渡航した。かく傳道者の進出に鑑み本部では明治四十四年、京城に朝鮮布教管理所を、大正二年奉天に滿洲布教管理所を設置して統轄した。

かく海内海外に前述の活動が行はれつゝある折柄、本部に於ては神殿建築の準備が着々進められ、明治四十四年十月廿七日、神殿、教祖

殿、祖靈殿、教廳、管長邸の起工式が行はれ、翌大正元年十一月廿八日神殿の上棟式、大正二年八月教祖殿の上棟式が行はれ、その年十二月神殿が落成し、その他の建築物も大正三年四月を以て滞りなく竣成し、翌年四月落成奉告祭が執行された。これと前後して各直轄教會は何れも信徒詰所を本部附近に新築又は増築し、面目を一新した。

この頃より、内地の教會は愈々充實し、海外に於ては、益々教勢の發展を見た、中華民國の傳道は厦門布教の後を次いで大正四年大分より上海に傳道し、翌五年京城より青島に伸び、七年には濟南に出て、天津に傳道し、一方滿洲では大正六年長崎よりハルビンに手を伸ばし、大正八年には京城より露領ウラヂホストツクに進出し、又、大正十五年大阪から中華民國の漢口に布教された。

地誌篇

越えて昭和三年より太平洋を越えて北米に教會の創立を見、次いで  
ハワイ、南洋にも道は進んだ。

序説 全國各地方教勢概観

本講に於ては全國各地方毎に府縣別に、人口と本教教勢とを比較考  
量して更に各地方の

地勢、氣候、産業、交通、宗教

等其他種々なる方面より、其の地方に於ける傳道の難易を検討して、  
概略乍ら將來の活動の指針を與へんとするものである。



地方誌

第一章 東北地方

縣別	人口	教會數	教徒數
青森	一、〇〇三、四〇〇	一一二	二、七〇七
岩手	一、〇七五、四〇〇	六八	一、三二七
宮城	一、二七三、一〇〇	九九	一、八三六
秋田	一、〇五八、六〇〇	一〇三	二、三四六
山形	一、二三二、一〇〇	五六	一、二八四
福島	一、六一二、一〇〇	一一〇	二、三一五

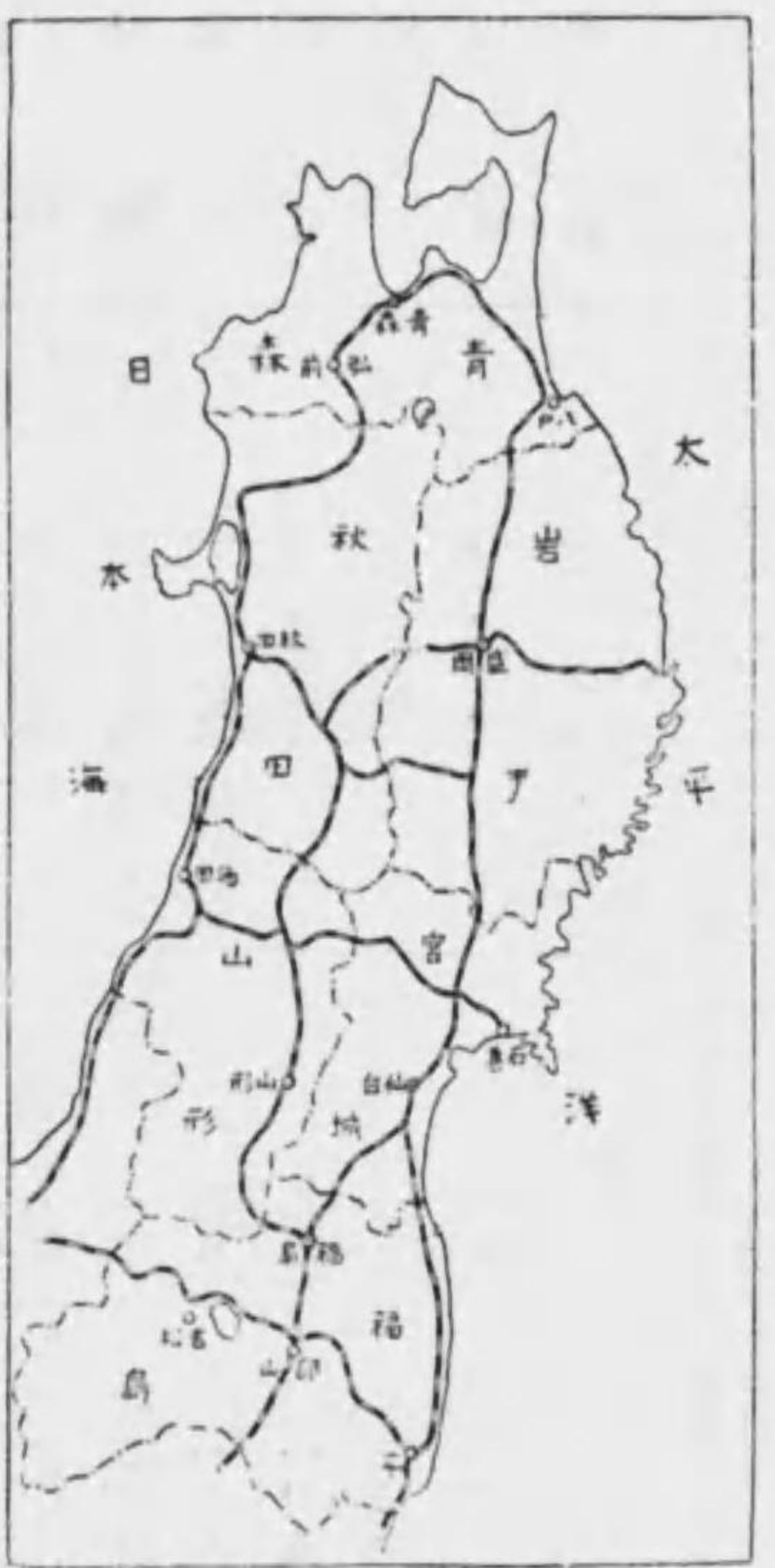
註(教徒數ノ中ニハ教師ヲモ含ム)

地方別	人口	教會數	教徒數
東北	六九八萬	五四八	一一、八一五
關東	一、五二七萬	二、四一二	四五、九八七
中部	一、二六〇萬	一、五三六	三二、三二一
近畿	一、二二九萬	三、九一二	一一五、〇一一
中國	五五七萬	九一五	二一、四六八
四國	三三六萬	七二五	一八、四三四
九州	一、〇一一萬	一、〇二二	二三、四二七
北海道	三一二萬	六四七	一一、二〇五

(統計ハ昭和十一年末現在)

行政區劃六縣

縣名	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島
縣廳所在地	青森市	盛岡市	仙台市	秋田市	山形市	福島市



**一 地勢** 東北地方は本州の北端にして、特に高峻なる山嶽は無いが、山地多く平坦地は少い。南は關東地方に接し、南西は中部地方新潟縣に連なる。南方を除き東北西は海に面し、津輕海峽を隔て、北海道に相對す。

**二 氣候** 總じて寒冷にして、特に日本海に面する地方は、冬期降雪多く、農作物の冷害も多い。太平洋に面する地方は比較的溫暖にして農作牧畜に適す。

**三 産業** 農業牧畜漁業を主とし、鐵・石炭等も産す。概して産業不振にして農山村の疲弊せる地方多し。政府は東北振興を國策として力を注がれつゝあり。

**四 交通** 鐵道は東北本線、羽越線等本邦縦貫主要線を始め、近年漸く交通發達す。

**五 宗教** 佛教盛んに行はると雖、見るべきものなし。

## 第二章 關東地方

府縣別	人口	教會數	教徒數
茨城	一、五六一、九〇〇	一六九	二、四九〇
栃木	一、二六〇、二〇〇	一四三	二、五五六
群馬	一、二五四、二〇〇	二二七	三、一一四
埼玉	一、五四三、四〇〇	三二一	六、一九三
千葉	一、五六二、三〇〇	一八七	三、八六三
東京	六、五七〇、八〇〇	一、一三六	一三三、三二〇
神奈川	一、八八六、一〇〇	二二九	四、四五一

**一 地勢** 北部西部に高峻な山地ある外は、大部分關東平野である。西方、北方は高い山地で限られ、東方、南方は海に面してゐる。海岸

行政區劃一府六縣	府縣名	廳府所在地
茨城	水戸市	水戸市
栃木	宇都宮市	宇都宮市
群馬	前橋市	前橋市
埼玉	浦和市	浦和市
千葉	千葉市	千葉市
東京	東京市	東京市
神奈川	横浜市	横浜市



秋の颱風期に多い。冬季の北西季節風は、山地に遮られて晴天が續き、裏日本の深雪地帯に比して著るしい相違である。山地は概して山岳性氣候で、夏は登山、避暑、冬はスキーの好適地となる。

**三 産業** 各種の産業が發達してゐる。農業盛んで米の産は多い。

は房總三浦の兩半島が突出して東京灣を抱き、東の中央に犬吠崎が突出する。又南方には火山島が點在する。

**二 氣候** 位置、地形、暖流の關係で、氣候は溫和である。雨量は初夏の梅雨期と初

養蠶は西部北部の山麓と臺地に盛んで、我國養蠶地帯の一で桑園多く製絲、絹織物業が盛んである。牧畜は京濱近郊で農家の副業として、鶏、豚、乳牛の飼養が盛んである。水産は漁業發達し鰹、鮪、鰻特に多く、東京灣の淺瀬には、蛤、淺蜆、海苔を養殖してゐる。鑛産は石炭、銅、金、銀が主で、工業は所謂京濱工業地帯を形成してゐる。

**四 交通** 陸上交通は東京を中心として東海、中央、高崎、東北、常磐、總武等の鐵道が發達してゐる。東海道本線は我國で最も設備よく、速度も大で、東北本線、山陽本線と共に本州縦貫線の一部をなしてゐる。海運は横濱を中心とし、航路は内外各地に通じてゐる。

### 第三章 中部地方

縣別	人	口	教會數	教徒數
新潟	二、〇〇八、八〇〇	一九八	三、四四六	
富山	八〇三、一〇〇	二九	六六七	
石川	七七〇、八〇〇	四九	一、二三七	
福井	六五二、六〇〇	七九	二、一三六	
山梨	六五〇、〇〇〇	六三	一、一七八	
長野	一、七一一、四〇〇	二一九	三、七二三	
岐阜	一、二三五、七〇〇	二〇五	四、七四四	
静岡	一、九六九、六〇〇	二五八	六、六一三	
愛知	二、九二四、四〇〇	四三六	八、五七七	

行政區劃九縣

縣名	新潟市	富山県	石川県	福井県	長野県	山梨県	静岡県	愛知県	岐阜県
縣廳所在地	新潟市	富山市	金沢市	福井市	長野市	甲府市	静岡市	名古屋市	岐阜市



富士山を主峰とし、温泉も多く山間盆地も多い。西部山地には三千米以上の高峰を有し、日本アルプス連峰は雄渾峻拔な山勢を現はしている。

一 地勢

此の地方は本州中最も幅廣く且つ高峻である。地形上から中央高地、北陸低地、東海低地の三つに分ける。東部山地は越後、三國、關東の三山地と那須火山脈の一部で活火山浅間山もある。中部山地は富士火山脈の地域で、

北陸低地には越後、富山、金澤、福井の諸平野があり、東海低地は駿遠の狭小な沿岸平野と三河、濃尾の諸平野がある。

二 氣候

氣候は日本海沿岸と中央高地と太平洋沿岸の三區に分れ各々特異性を有してゐる。日本海沿岸は冬季積雪多く交通に障害を與へ麥作に不利で他地方へ出稼するもの多い。夏季は雨少く、且つ高温で米作が盛んである。中央高地は土地が高いので氣温低く、大陸性氣候である。太平洋沿岸は夏季は南東風が吹いて雨多く、冬季は雨少い。

三 産業

工業、農業、養蠶業は主産業である。農業は北陸、東海に盛んである。養蠶は中央高地の諸盆地溪谷と濃尾平野に盛んで桑園が多い。牧畜は愛知縣の養鶏、林業は中央高地を主とし、鑛産は新潟縣の石油が第

一である。水産は太平洋の鰹、鰯、鮪、日本海岸の烏賊、鯖、鯛等が名高い。工業は本地方の重要産業で製絲は全國の四割を占め、長野、愛知、山梨、岐阜の諸縣に多い。絹織物は福井縣から石川縣へかけての地域に多い。製陶業は瀬戸、多治見地方盛んで其の他漆器、賣藥、紙、時計等の製造も著名である。

**四 交通** 關東、近畿の中間に位し、東海道、甲州街道、北陸街道は東西交通の重要な道路である。鐵道 東海道本線、中央本線、北陸本線は各々是等の道路に沿ふて發達し、羽越本線、小濱線、關西本線等と連絡してゐる。横斷線は上越線、信越本線、高山本線等で南北交通を計つてゐる。敦賀は大陸との連絡港として重要である。

**五 宗教**

此地方には熱田神宮を初め、古來神社多く、寺院又一萬

を算へ、信州の善光寺、甲斐の身延山、名古屋の東西本願寺別院等佛教の地盤固く寺院は畿内に次いで多い。美濃、飛彈、尾張、三河等眞宗盛んで駿遠地方には禪宗が行はれてゐるが、殊に多年猛烈な運動を續けて釋尊の遺骨を京都より遷して奉安したといふ名古屋の日蓮寺の如き今や中京が日本佛教の中心地としての位置を占める情勢にありと言はれてゐる。

教派神道は神道中第三位の御嶽教斷然優勢で、次いで神道本局、金光、扶桑（静岡）、愛知（修成（静岡））實行（長野）等行はれてゐるが、山梨は僅かに御嶽本局が目立つだけである。キリスト教の勢力は見るべきものなく、微々たる現状にあるのは佛教信仰の傳統固きを思はせらる。

## 第四章 近畿地方

府 縣	人 口	教 會 數	教 徒 數
三 重	一、一七八、二〇〇	三〇五	八、三七〇
滋 賀	七一五、六〇〇	一一二	四、六五六
京 都	一、七三三、八〇〇	三八八	一一、五六〇
大 阪	四、四五五、四〇〇	一、三七四	四一、四二七
兵 庫	二、九八一、一〇〇	九九一	二四、七六三
奈 良	六二五、五〇〇	三八一	一六、二九六
和 歌 山	八七一、一〇〇	三六一	七、九三九

**一 地勢** 北西部山地、中部低地、南部山地の三區域に分たれ、比良、比叡、六甲斷層崖と櫛田川、紀ノ川斷層谷を其の境界線とする。

行政區劃二府五縣	府縣名	府廳所在地
三重	津市	津市
滋賀	大津市	大津市
京都	京都市	京都市
奈良	京都市	京都市
和歌山	和歌山市	和歌山市
大阪	大阪市	大阪市
兵庫	神戸市	神戸市



中央部低地は本地方の文化地域である。行政上二府五縣に分たる。

**二 氣候** 日本海斜面は裏日本式で、太平洋斜面は表日本式である。中部低地の内部盆地は稍大陸性氣候であるが、瀬戸内海沿岸は

晴天多く、降水量の少い所謂瀬戸内海式氣候である。

**三 産業** 大都市近郊には蔬菜栽培、園藝が發達してゐる。茶は三重、京都の山麓に多く、果樹は有田川、紀ノ川、大和川流域の山腹に

多い。養蠶は北西部山地、牧畜も北西部に盛んで、林業は南部山地に、水産業は太平洋沿岸に盛んで、志摩半島の眞珠養殖は名高い。工業の發達は全國第一で、工業地帯は阪神、京滋、三重の三地帯に分れ、主として綿絲、綿織、毛織等盛んで、次いで機械造船、化學工業も著はれる。京滋工業地帯は人絹、染織が知られ、三重の伊勢海沿岸は綿絲、綿織が主である。

#### 四 交通

陸上交通は中部低地が最も盛んで道路網は京都、鐵道電車網は大阪を中心とする。主要鐵道線は東海道本線、山陽本線、山陰本線、關西本線、北陸本線があり、高速度の長距離電車網の發達と設置の優良なことは全國第一である。

内陸水路は琵琶湖と淀川を主とし、海運は神戸、大阪を中心とする。

る。

#### 五 宗教

近畿地方は古く秦韓人によつて諸種の文明が傳へられ、佛教は欽明朝以來信仰の中心となり、宗教の興隆は神社佛閣の建立を促し、數多の宗教家が多く近畿に出て、且つ天理教として新興宗教の起つたのも決して偶然ではない。又我國の文化が全國に普及したのも、常に近畿が其中心であつた事は勿論である。



## 第五章 中國地方

縣別	人口	教會數	教徒數
鳥取	四九〇、七〇〇	一一〇	二、〇二六
島根	七四八、七〇〇	七九	二、一三五
岡山	一、三四二、八〇〇	二〇九	五、三七八
広島	一、八二八、五〇〇	二七九	五、八八六
山口	一、二〇二、〇〇〇	二三八	五、九四三

**一 地勢** 近畿地方の西に位して本州の西端を占め、地形は東西に長くして、山陰、山陽兩道を區分し、北は日本海に面し、南は瀬戸内海を隔て、四國と相對し、南西端は九州島に對峙して居る。

### 二 氣候

山陰道と山陽道と大いに異なり、従つて人文發達上に及ぼせる影響も著しく、即ち山陰地方は冬季の雨雪量極めて多く、之に反して山陽地方は日本海面から來る寒氣と雨雪とを避け南には内海を隔て、四國島が横たはり、太平洋から來る濕風を遮るのて晴天多く、降水量は甚だ少い。

### 三 交通

内海に面した山陽地方は水陸共に交通夙くより開けてゐるのに反して、山陰地方は海岸線の屈曲少き日本海に面して水路の便に乏しく、地勢上鐵道、道路の發達を阻

縣名	鳥取	島根	岡山	広島	山口
縣廳所在地	鳥取市	松江市	岡山市	廣島市	山口市



害せられ、我國の鐵道開通以來五十數年の歲月を経て、近年漸く山陰本線の全通を見た有様である。

四 産業

産業としては米が主要農産物で、南部の備前米、防長米特に著はれ、牧畜は山陽の牧牛、日本一の稱あり、水産、鑛工業之に次ぎ盛んであるが、概して山陰地方は天恵薄き状態である。

五 宗教

佛教は六千有餘の寺院を有し、眞宗の地盤殊に固く、神道に於ても黒住、金光兩教共に岡山に發祥して中國一帯に普及し、大社教又出雲大社に本廳を置いて居るので、是等の傳統的勢力は侮る可からざるものがある。即ち黒住教は此地方に全國一の勢力を張り、金光教は本部を中心として堅實な地盤を造つて居る。大社教は島根縣に信徒數一位を占めて居る。キリスト教に到つては日本協同基督教會が、

山陰地方の宗教概況

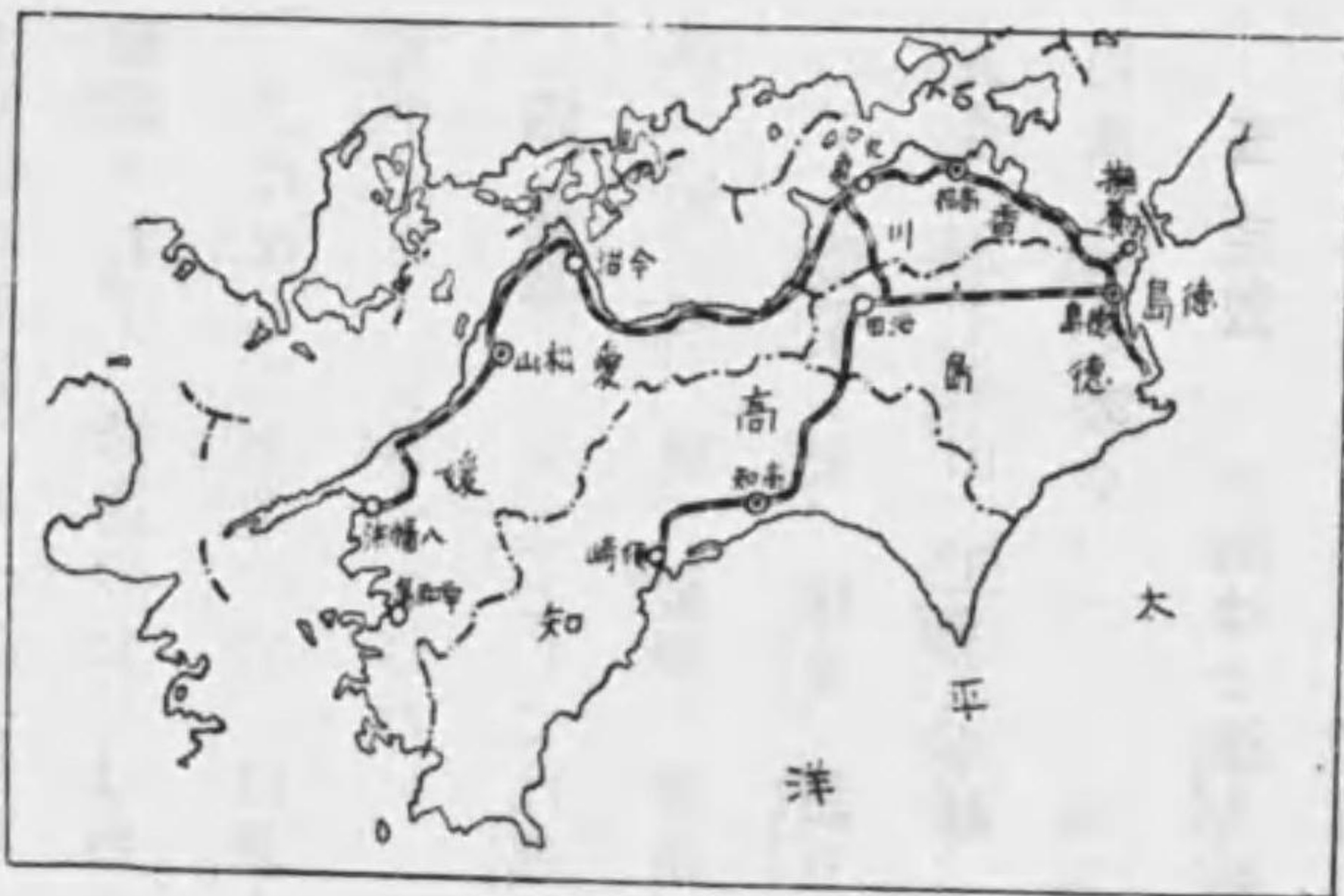
廣島に地盤を置いてゐる以外中國一帯さしたる勢力はない。

## 第六章 四國地方

縣別	人口	教會數	教徒數
德島	七三一、三〇〇	二七六	六、七五〇
香川	七五二、〇〇〇	一一八	三、三八七
愛媛	一、一六九、七〇〇	二三三二	五、一五七
高知	七一四、三〇〇	九九	三、一四〇

**一 地勢** 四國は海洋四周し、北は瀬戸内海を隔て中國と對し、東は紀伊水道に、西は豊豫海峡に面し、南方一帯は太平洋に浴し、阿波、讃岐、伊豫、土佐の四國より成るので四國島と呼び、島形蝙蝠が翼を擴げた形を成して居る。

縣名	縣廳所在地
德島	德島市
香川	高松市
愛媛	松山市
高知	高知市



**地形**は東西に長く讃岐山脈と四國山脈とが併行して東西に走り、山地は總面積の二分の一を占めて居る。

**二 氣候** 氣候は其位置が南方に在るので概して良好で、冬季霜雪少く内海面は晴天多くして雨量少く、太平洋は夏の降雨量多く、爲に高温度と相俟つて樹木繁茂して鬱乎たる林相を呈して居る。

**三 交通** 山岳多き爲め鐵道の發達は充分ならず、最近土讃線の全通に依

り交通の利便を増したが、東方太平洋岸と西方豊豫水道沿岸には未だ敷設されず、陸路の交通は恵まれて居ない。

之に反して海運の發達は著るしく、内海方面は特に進んで居るが、太平洋岸は其割合ではない。

四 産業

産業としては鯉節の本場もある位で、水産（鯉、鯨、珊瑚、鮪、鯖、鯛、製鹽）豊富であるが、平野が少く交通不便の地多くして、農業（米、裸麥、蠶豆、甘藷、葉煙草、葉藍）養蠶業、林業、鑛産（別子銅山）工業（生絲、綿絲、紡績綿、フランネル、メリヤス、和紙）等である。

五 宗教

四國は弘法大師誕生の地で、佛教寺院約二千五百の約半数は眞言宗で、弘法の感化功德よく浸潤して、阿波、讃岐では巡禮を

する習慣の時代もあつたが、其全盛時代は已に過ぎ去つて居る。

キリスト教は阿波の國は一步も入る餘地なく、四國には何等勢力らしきものは認められず、神道各教では黒住、大成、大社等が多く分布されて居るが、宗教活動としては本教の右に出づるものはない。

## 第七章 九州地方

縣別	人口	教會數	教徒數
福岡	二、八〇三、六〇〇	四〇五	五、一四二
佐賀	六八五、〇〇〇	八〇	二、〇一六
長崎	一、三一〇、二〇〇	一五一	三、二二四
熊本	一、三九四、〇〇〇	九三	二、六七八
大分	九八七、七〇〇	一一三	二、二九八
宮崎	八三七、八〇〇	七八	一、四〇七
鹿児島	一、五九八、七〇〇	九三	二、一六二
沖縄	五九五、六〇〇	九	五〇五

**一 地勢** 九州島は沿岸線の屈曲複雑にして大なる事本邦五大島中他に比類なく、半島、岬角、港灣到る處に分布し、西海岸は特に發達

縣名	縣廳所在地
福岡	福岡市
佐賀	佐賀市
長崎	長崎市
熊本	熊本市
大分	大分市
宮崎	宮崎市
鹿児島	鹿児島市
沖縄	那覇市



氣候は溫和で南方に行くに従ひ暖熱甚しく、熱帶植物も發育して日向の青島の如き熱帶植物が密生して奇觀を呈して居る處もあり、鹿児島、宮崎兩縣は全國有數の保健地と言はれて居る。

**三 産業** 地勢の宜しきと氣候に恵まれて居るので、農業、水産業

して居る。山脈は北に筑紫山脈、南に九州山系とあり、此間に阿蘇火山帯があつて、南方には霧島火山帯があるので、温泉が頗る多い。

**二 氣候** 海洋四周し、土地は南に偏して居るので、

林業、鑛産業、工業等著るしく發達して北部地方は我國第一の工業地として繁榮し、福岡縣には市部十ヶ所を算へる程である。

#### 四 交通

地勢と産業の發達との影響で、北部及び西部の交通の發達は著るしく、門司から鹿兒島に至る九州本線は夙くから開通し、大小の支線も分岐して居るが、東部も又近年日豊線の全通成りて今では九州を一周する事になつた。其他東西を結ぶ豊肥線(熊本、大分)の外近年久大線の開通を見る等、交通の利便は昔日の比ではない。

#### 五 宗教

佛教では眞宗が最も發展してゐる、九州一圓に五千有餘の寺院は現存してゐても、祖先を大切にするとはいふ傳統から其命脈を保つて居る現状である。

キリスト教に至つては長崎に古くから渡來した關係上、長崎縣には

根強い地盤を持つて、教會も七十餘あり、福岡縣が五十ヶ所程で別に敬神崇祖、尊王愛國を主とする神道思想が強烈なので、佐賀、大分の兩縣には皆無に等しい狀況である。

神道では、神道中唯一つ南九州に發生した神理教が、尊王愛國から進り出た人格宗教であるだけに、福岡縣に全國信徒の過半数を占めて居る外、御嶽教が之れ又全國一の勢力を福岡に占めて居るといふだけで、次が大社、實行、神習其他であるが九州に於ける神道各教派の總和よりも本教の現勢が遙かに優勢である。

本教の傳道線は明治二十五年大阪より大分に入り、二十六年には京都より滋賀を経て福岡に入つて居る。

## 第八章 北海道地方

市別	人口	教會數	教徒數
札幌	二〇・七萬	三五	
旭川	九・一萬	一九	
小樽	一五・四萬	三四	
函館	二〇・七萬	四一	
室蘭	六・五萬	八	
釧路	五・六萬	九	
帯広	三・六萬	一三	

**一地勢** 北海道本島と千島列島から成る昔の蝦夷の地で、明治維新後漸く開け、明治二十一年北海道廳が設けられてから急激に開拓さ

支廳名	支廳所在地
宗谷	稚内
網走	網走
根室	根室
釧路	釧路
十勝	帯広
日高	浦河
上川	旭川
留萌	留萌
空知	岩見沢
石狩	札幌
膽振	室蘭
後志	倶知安
渡島	函館



れ、其の開発には同緯度にある米國に範を採つたので内地と著しく相違する所がある。

**二氣候** 雨量は少く一般に寒冷で、我國の寒地性氣候を代表して居る。地域が廣いので場所により著るしい相違はあるが、太平洋

沿岸は寒流の影響を受け、夏季も低温で海霧多く、生物の生育や航海を妨げる。オホーツク海岸は冬季結氷し、早春には流水がある。日本海岸は暖流のため東岸地方より稍々高温であるが、冬季は積雪稍々多く陰鬱である。内部は大陸性氣候で寒暑の差は大であるが、夏季の農

作には却つて幸である。

**三 産業** 産業も初めは水産業、林業を主としたが、今は農業、工業が發達してゐる。行政上七市一四支廳に分れるが地理的に半島部、中央低地、樞幹部、千島列島の四區に分ける。

**四 聚落** 移住民は奥羽、北陸地方の者が大部を占めて居るが、明治の中葉、人口稠密な近畿、中國地方よりの移住者多く、濃尾、四國、兵庫縣等、日清戦後急激に移民増加し、現今では各地方から移住して居る。

北海道は函館、札幌、小樽、旭川、室蘭、釧路の六大都市を中心に開けたので、是等の都市に多く人口は集中されて居るが、近年市制を布いた帶廣の如き新都市も漸次出現する趨勢にあつて、新天地だけに

土地發展の形態は内地とは趣を異にし、大體次の如き聚落に大別されて居る。

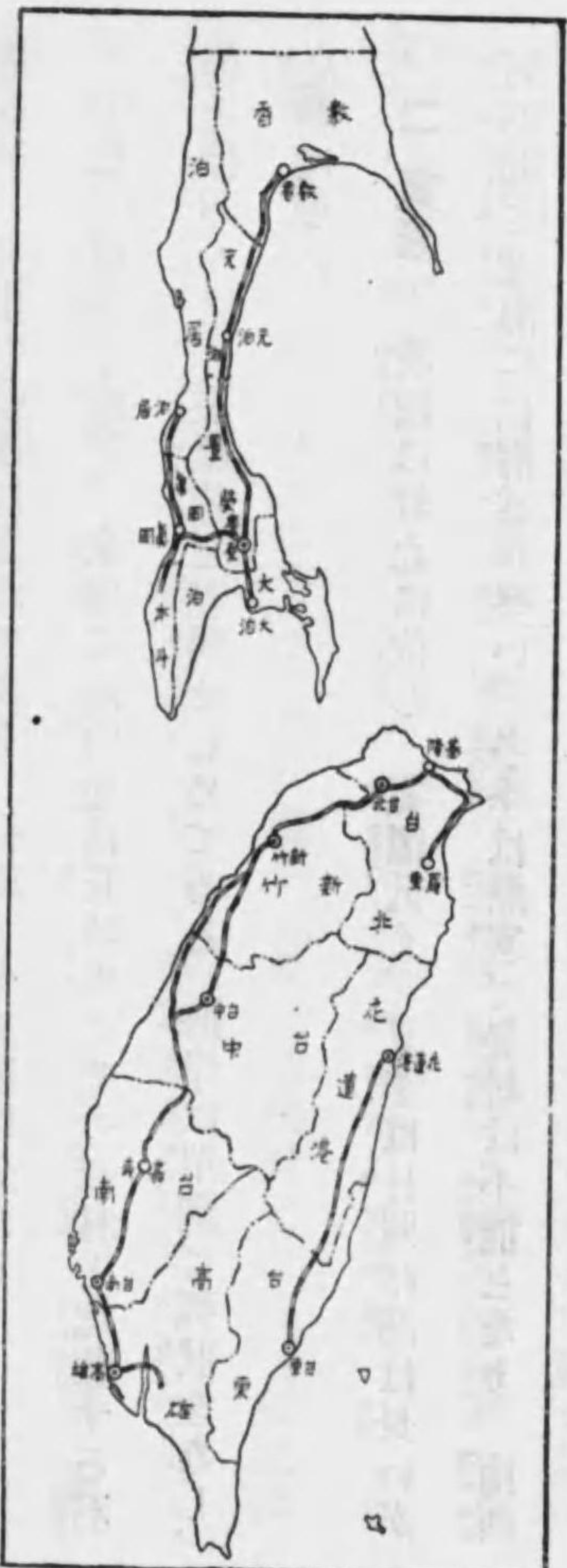
- (一) 農林式聚落
- (二) 平原式都市
- (三) 漁村式聚落
- (四) 港灣都市
- (五) 鑛山式村落
- (六) アイヌ聚落

**五 宗教** 宗教としては神佛其他類似的の俗信仰も入つて居るが、佛教は寺院説教所一〇二九を有して、其内眞宗最も多く、基督教は舊教ハリストス正教早くより函館に地盤を固め、新舊兩教併せて九五教



會、神道は神道本局、御嶽、金光、黒住、扶桑の順で一三三、天理教は（昭和十一年末）六四七教會を有して居るが、獨立自營の精神に富んだ植民者には、死後の冥福を祈る教へよりも、力と生命の指導精神である宗教が歓迎されて居る。

第九章 樺太及び臺灣地方



樺太	臺灣	人口	教會數	教徒數
三三一、九四三	五、二二二、四二六	四六	三四	八一〇
				八四五

支廳名	敷香	元泊	豐原	大泊	泊居	眞岡	本斗
支廳所在地	敷香町	元泊村	豐原市	大泊町	泊居町	眞岡町	本斗町

### 樺太地方

**一 地勢** 日露戦役以後我國の領土となつた寒地性植民地である。北方的位置により氣候寒冷で、原始産業の林業と水産業が主なものであるが、文化の發達は遅れてゐる。行政上七支廳に分たる。

南北に細長く延び、東西の兩山地は丘陵性でその森林と埋藏する石炭とはバルブ、製紙業を勃興せしめてゐる。海岸は單調で弧狀をなし、島嶼は少い。

**二 氣候** 我國の最北に位し、氣温低く、夏季は日照時間は長いが短期間で近海には海霧が多い。冬季は酷寒で農耕は不能となり、南西海岸以外は概ね海面も結氷する。

**三 産業** 森林は本島の主要財源で全島の半分は原生林に被はれ、

原木の儘移出するものも多いが、バルブ、製紙の工業が活氣を呈し、其の産額は全國第一位を占める。水産業は歴史の古い産業で鯨を第一とし、昆布、鱈、鮭、鱒等の寒海性の漁利に富みその製造物も多い。貿易は主に内地との間に行はれ、大泊、眞岡は開港場である。

**四 交通** 道路交通は不便で冬は樞が主要交通機關となる。鐵道は東海岸線、西海岸線、豊眞線と私線の樺太鐵道がある。航路は結氷、流水、濃霧等の障害はあるが、南部の諸港と本州、北海道の諸港と連絡する。

### 臺灣地方

**一 地勢** 日本列島の最南端に位し我が南方發展の策源地である。東半は地形高峻であるが、西半には廣い平野展開し、主要生産地帯を

行政區劃	
州廳名	州廳所在地
臺北州	臺北市
新竹州	新竹市
臺中州	臺中市
臺南州	臺南市
高雄州	高雄市
臺東廳	臺東街
花蓮港廳	花蓮港街
澎湖廳	馬公街

なしてゐる。行政上、五州、三廳に分れるが、地理的には西部平野、中部山地、東部地方、島嶼に四大別される。

島の主軸をなす高峻な臺灣山脈は東偏して南北に縦走し島の北端には大屯火山が噴出し、その餘波は火山臺地に及んでゐる。山地には森林繁茂するが開發遅れ、西部平野は重要生産地であるが、河川は水運に乏しい。

**二 氣候** 熱帶性で氣温の差少く四季の變化に乏しい。雨量は多いが季節風の關係上北部と南部とは正反對である。南北の中間にある西海岸は夏冬とも雨量が少い。植物は低地に熱帶性のものが繁茂し、動物には内地に見られない穿山甲、水牛等がある。

**三 産業** 従來不振であつたが我が官民の努力によつて發達し、特

に熱帶氣候に恵まれ農業とその附隨工業の發展は著るしい。農業は米、茶、甘藷、落花生、バナナ、鳳梨等は主要農産である。牧畜は水牛、黄牛、豚の飼養が盛んで、水牛、黄牛、農耕運搬に使用される。林産は檜をはじめ、樟腦の生産を主とする。鑛産は石炭、金、石油等、水産は鱈、鮪、鯉、鯛等にして工業は主として製糖業盛んで北部の製茶も代表的のものである。

**四 交通** 西部平野は至便であるが、他は一般に不便である。縦貫線は西部平野を縦貫し臺中、淡水、潮州等の支線を分岐してゐる。東部には臺東線がある。南部は私設線多く鐵道網は極めて密である。河川は舟運の便に乏しい。海運は基隆、高雄を中心とし、共に築港完成し本島の二大關門をなすが他に良港は乏しい。西岸の港は浅く汽船は

沖合に碇泊して竹筏を使用する。近年内地、臺灣間に定期航空路が開かれた。

**五住民、都市** 住民九割以上は漢族の本島人で、内地人、蕃人は之に次ぐ。本島人は福建地方から来た閩族と廣東地方から来た粵族との子孫である。大部分は西部平野に住し、農商に従事する。蕃人は馬來人種に屬する先住民で其數約十五萬を數へる。生蕃は七種族に分れるが教化次第に進み、兇暴性は漸次減少してゐる。内地人の移住者は二十七萬で主に都市に生活する。都市は主に西部平野にあるが、農業を主業とするので一般に少い。

### 第十章 海外傳道

區分	人口	教會數	教徒數
朝鮮	一一一、八九九、〇三八	一八一	三、八五八
滿洲國		七七	一、八四七
關東州	一、一三〇、〇〇〇	二九	六五
支那		二九	七七六
北米其他		七〇	四三五

#### 海外傳道の發端

明治三十一年よりの國內傳道は専ら伸張期に入り、内面よりの文化發達、或は世間よりの幾多の迫害、障碍のため却つて信仰の熱度を加

へ、明治三十七年には撫養系が徳島より釜山に傳道されて朝鮮傳道が開始され、同三十七、八年日露戦役の結果日本の國際的地位の上昇につれて青年傳道者間に海外進展の急務を唱道する聲旺んとなり、こゝに内地傳道の充實に伴つていよいよ海外にまで道を伸ばすに到つた。

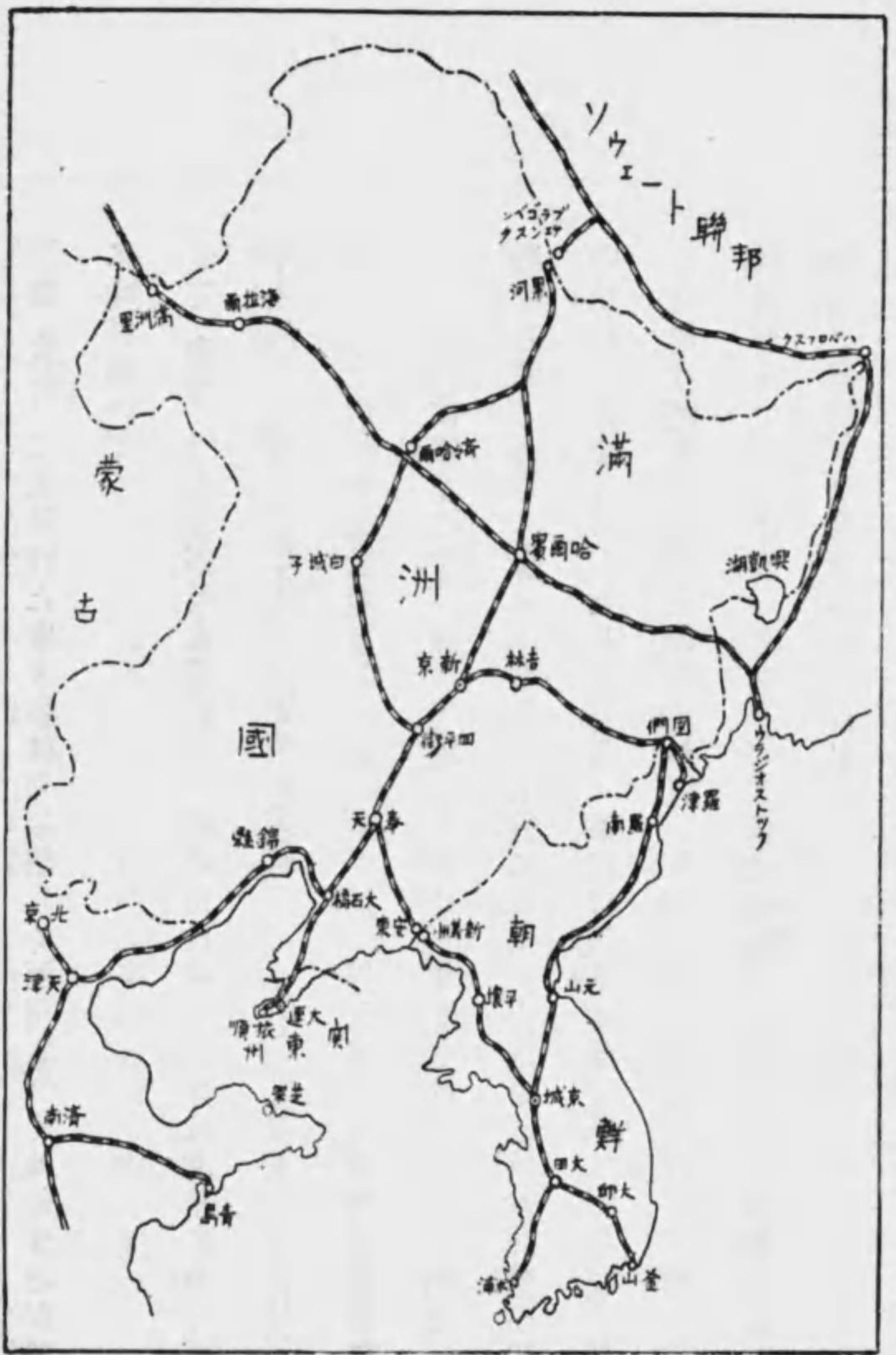
### 朝鮮傳道

**一 地勢** 北部は高峻で國境には長白山脈走り、その南方一帯は高原である。中部、南部は太白山脈走り、表朝鮮と裏朝鮮とに分ける。裏朝鮮に北境の豆滿江を除いて大河なく、海岸平野も極めて狭小である。表朝鮮には鴨綠江を初め、大同江、漢江等の諸大河多く、沿岸の所々に平野が開けてゐる。又海岸は出入多く島嶼も頗る多い。

**二 氣候** 南部は溫和で中國、北九州と大差はない、北部は大陸の

影響を受けて大陸性となり冬は寒氣厳しく河川悉く凍結するが割合に凌ぎ易い。

**三 産業** 農業が最も盛んで一般に田は南部に畑は北部に多く、近年水源の涵養、灌漑工事も進み、農産物が増加しつゝある。米は大邱、大田、全州等を集散地とし、麥、粟、稗、馬鈴薯、大豆等は北部に多い。牧畜は盛んで牛、豚は内地より多く、北鮮では近時羊の飼養が奨励せられてゐる。森林は全土の七割に及ぶ。南部では植林經營が着々成功し面目を改めんとしてゐる。鑛産は豊富で金、鐵、石炭等を産し、水産業は盛んで内地人の出漁が頗る多い。西岸は晴天續き、潮汐満干の差が大で製鹽が盛んである。工業は織物、陶器、紙、金屬器具の外紡績、肥料、和洋紙等も行はれる。



**四 交通**

主要道路には定期自動車の運轉がある。鐵道は京釜、京義兩本線が半島縦斷の幹線をなし、内地、滿洲國間の重要連絡線をなしてゐる。主要河川は流れ緩かて、下流は水運の便が多い。海運は釜山、下關間に鐵道連絡船が通じ、羅津と新瀉、敦賀間には日滿定期航路がある。尙東岸の元山、南岸の釜山、西岸の仁川は内外航路の中心地である。

**五 宗教**

佛教の朝鮮布教は昔、眞宗大谷派の僧侶が釜山で布教したのであるが、明治十年以降渡來したもので現に布教に従事する宗派は眞言、日蓮、淨土、眞宗及天台宗等である。内地佛教は主として在鮮内地人を信徒としてゐるので、朝鮮人に向つての布教は殆んど見るべきものがない。内地神道は本教を初めとして神理、金光、神習、大

社、扶桑、黒住、神道教の八派が明治二十六年以降前後して渡來してゐるが、多く内地人を對象としての布教であつて朝鮮人教化に至つては本教が京城に教義講習所を開いて、布教教育を施すもの一を數ふるのみである。

キリスト教は現在その宣教に於ては著るしく發達し、宣教師が自ら朝鮮語に熟達して宣教すると同時に、朝鮮人の傳道師を養成して布教せしめ、一方醫療、孤兒院等の施設をなし極めて廣き範圍に互つてその手を伸ばしてゐる。

**六 本教の傳道線** 朝鮮の道は明治三十七年徳島より釜山に（撫養系）傳道され、明治三十六年には京城へ（越乃國系）布教され、全朝鮮から滿洲へと伸びて行つたのである。直轄教會は朝鮮宣、鮮京宣各

れも京城府に在り。

### 滿洲傳道

滿洲に初めて本教の傳道が開始されたのは明治四十四年である。この年大分より南滿洲安東縣に傳道して初めて南滿洲に道をつけ、更に大正二年には長崎より長驅新京に傳道して初めて北滿洲に道を開き、翌三年には朝鮮京城より遼陽に伸びて、こゝに有力なる滿洲傳道の根據を築くに到つた。

降つて大正六年には長崎より再び北滿洲ハルピンに手を伸ばし、大正八年には朝鮮京城より一躍ウラヂホストツクに進出するに到つたのである。

### 中華民國傳道

中華民國の傳道は明治三十年靜岡より開かれた臺灣よりの傳道によつて明治三十九年厦門に於て始められた。その後大正四年大分より上海に傳道して南支那に手を染め、更に翌大正五年には朝鮮京城より青島に傳道して、山東の道を開き、更に大正七年には濟南に伸び、新たに天津に傳道して北支那の根據を築いて、而して中部支那に手を染め中華民國傳道は漸次擴大されて行つたのである。

滿洲傳道に於て見られる朝鮮京城大分等よりの傳道が優勢であると云ふ事は面白い現象である。而して最近になつて新しい教會系統の發展が見えてゐる事は、本教一般が隣邦中華民國教化に向つて活動を開始しつゝある事を裏書してゐるとも云へる。

### 北亞米利加傳道

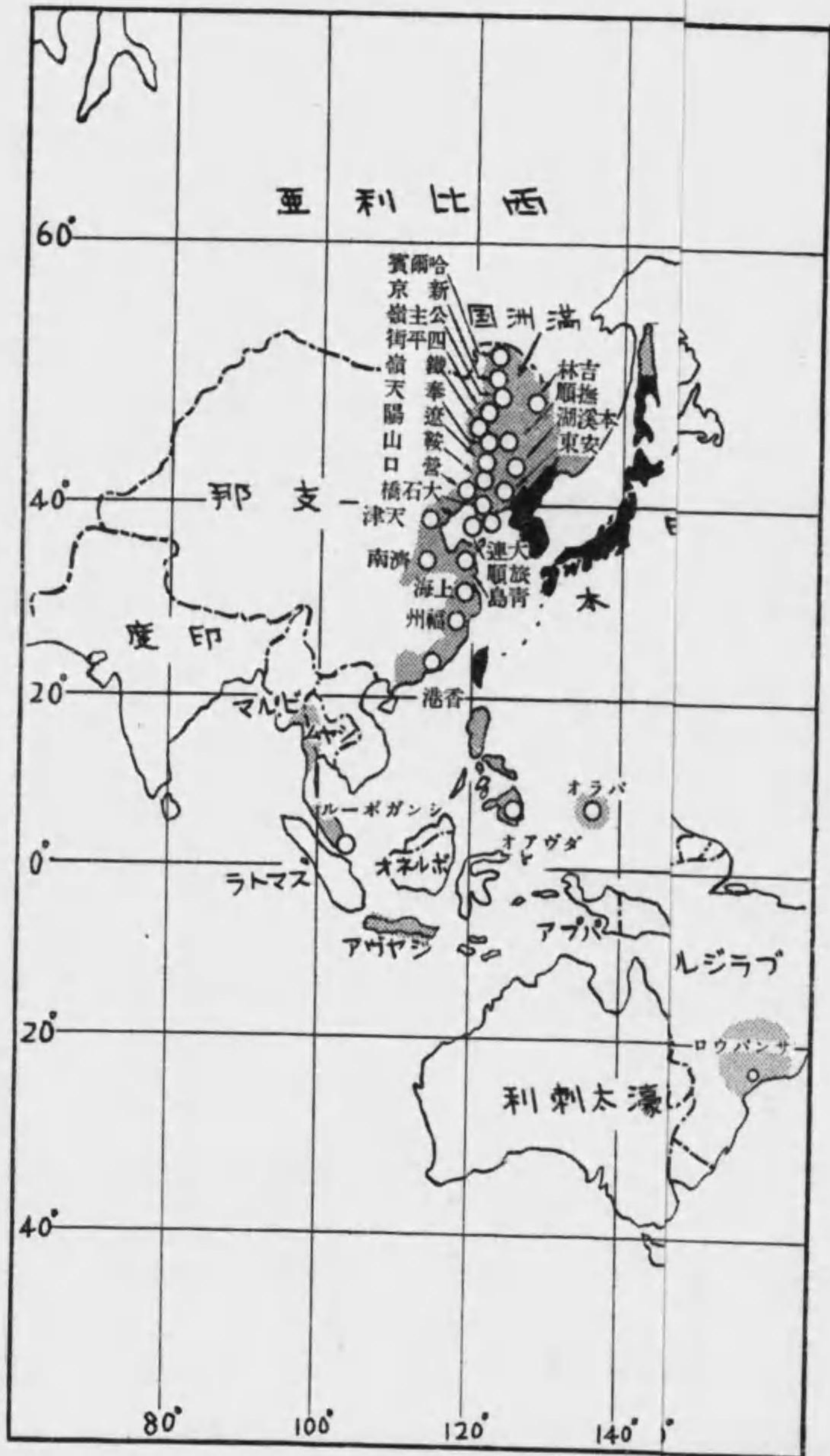
北亞米利加に本教傳道の開始を見たのは、昭和三年に到つてからである。現在北アメリカには教會數五十九ヶ所、教師數一五三を算するのである。

### 南洋傳道

南洋方面の傳道は大正十一年熊本よりシンガポールに分布されたのである。現在漸く傳道者の渡航も盛んとなり、將來の南洋傳道に期待すべきものがある。

以上海外傳道の發端と、その漸く旺んならんとしつゝある進展の概況をうかゞつたのであるが、各地に共通して見られる面白い現象として、一つの教會が設置されると同じ系統の發展がそれを根據としてなされるものである。





### 結語 傳道の將來性

更に注目すべき現象として、最近に於て漸く各系統教會の海外進出に對する企畫をあげねばならない。事實に於て大正十五年御教祖四十年祭を一轉機として、海外教化の機運は頓に白熱化し、奉天、上海、天津、アメリカには夫々傳道廳を設置して、益々海外發展の組織的企畫が施行されてから滿洲、中華民國には勿論、遠く北アメリカ、ハワイ、南洋方面に本教信仰を益々旺んならしめたのである。而もその後に来るべき我等天理教徒の大使命こそは、まさに海外發展——全世界教化でなければならぬ。

(完)



# 世界進出



附

錄

本部直轄教會、設立年、歴代会長一覽 (統計年鑑所藏)

(昭和十三・八調)

教會名	現在地	設立年 (本部認可)	分 離 時 所 屬 會 名	歴代会長名	註	
郡山大	奈良縣郡山町	明治二一		平野 檜藏	増田 甚七	平野 規知雄
兵神大	神戸市	明治二二		清水 與之助	富田 傳次郎	清水 由松
山名大	静岡縣袋井町	明治二一		諸井 國三郎	諸井 清麿	諸井 慶五郎
船場大	大阪市	明治二二		梅谷 四郎兵衛	梅谷 梅次郎	梅谷 忠雄
河原町大	京都市	明治二二		深谷 源次郎	深谷 徳治郎	深谷 源次郎
撫養大	徳島縣撫養町	明治二二		土佐 卯之助	土佐 敬信	土佐 敏一
東大	東京市	明治二二	東	上原 佐助	上原 義彦	
敷島大	奈良縣三輪町	明治二三		上野 吉三郎	山田 伊八郎	山田 倉之助
日本橋大	東京市	明治二三	東	中臺 赤太郎	中臺 勘藏(平次郎)	中臺 庄之助

(●印ハ本部直轄教會ニ  
ナツタ當時ノ會長)

高安大	南海大	芦津大	高知大	北大	湖東大	甲賀大	水口大	中河大	名京大	中和大	櫻井大	筑紫大					
大阪府中河内郡高安村	新宮市	大阪市	高知市	大阪市	滋賀縣八日市町	滋賀縣貴生川村	滋賀縣水口町	大阪府中河内郡南高安村	名古屋市	奈良縣北葛城郡磐園村	奈良縣櫻井町	福岡縣木屋瀬町					
明治二二	明治二四	明治二二	明治二四	明治二四	明治二四	明治二二	明治二五	明治二三	大正一二	明治二四	明治二六	明治二六					
河原町	河原町	河原町	河原町	河原町	河原町	河原町	河原町	山名	郡山	郡山	湖東	湖東					
●松村吉太郎	●松村隆一太郎	●山田作治郎	●井筒梅治郎	●井筒眞彦	●島村菊太郎	●茨木嘉四郎	●佐治正隆	●山田太右衛門	●藤橋光次良	●板倉槌三郎	●山本利三郎	●田中善永	●諸井忠彦	●植田平一郎	●富松楢次郎	●富美賢太郎	●福原惣太郎
●中谷與十郎	●松村吉太郎	●畑林爲七	●井筒五三郎	●島村國治郎	●山中彦七	●佐治正嗣	●山田勘治郎	●板倉槌三郎	●前川菊太郎	●植田楢松	●富松直七	●森井治三郎	●福原一正	●植田英藏	●富松ゑな	●能美信義	
●松村吉太郎	●松村義孝	●山田清治郎	●井筒たね	●村田慶藏				●藤橋一春	●田中松次郎								

越乃國大	名東大	麴町大	日光大	飾東大	東本大	嶽東大	島ヶ原大	堺中	城法中	大縣中	御津中
敦賀市	徳島市	東京市	栃木縣日光町	姫路市	東京市	静岡縣駿東郡大岡村	三重縣阿山郡島ヶ原村	堺市	奈良縣磯城郡川東村	大阪府中河内郡堅下村	大阪市
明治二四	明治二五	明治二九	明治二五	明治二三	明治三一	明治二五	明治二二	明治二三	明治二五	明治二五	明治二四
河原町	撫養	北	甲賀	兵神	高安	水口	郡山	高安	高安	高安	高安
●宇野善助	●正木國藏	●上田善兵衛	●久保清次郎	●速水岩吉	●紺谷久平	●中川よし	●鈴木半次郎	●喜多治郎	●山本芳次郎	●増井幾太郎	●小松駒吉
●高橋直秀	●柏原源次郎	●茨木正徳	●久保正徳	●速水乃惠	●紺谷金彦	●中川庫吉	●鈴木平作	●喜多秀太郎	●市川榮吉	●増井ふみ	●小松駒太郎
●宇野又三郎		●久保治三郎					●鈴木つる	●川森勘五郎	●平野義太郎		

東愛中	中津中	笠岡中	大江中	梅谷中	西中	旭日中	豐岡中	平安中	八木中	奈良中	生野中	治道中	
名古屋市	大分縣中津市	岡山縣笠岡町	大阪市	奈良市	大阪市	奈良縣山邊郡二階堂村	兵庫縣豐岡町	奈良縣龍田町	奈良縣八木町	奈良市	兵庫縣生野町	奈良縣帶解町	
明治二五	明治二六	明治二四	明治二五	明治二四	明治二五	明治二八	明治二五	明治二五	明治二六	明治二五	明治二五	明治二六	
南海		芦津					北				北		
●西初太郎	泉田藤吉	河合豐	中西金次郎	駒谷石松	南濱三郎	高田邦三郎	岡本榮太郎	木岡儀八郎	飯尾信太郎	飯山庄次郎	岸本又次郎	森川重太郎	●田川富吉
	今村熊太郎	上原伊助	中西孫三郎	宮森與三郎	和田俊八郎	上原箕八郎	山澤爲造	●木岡友吉	板倉槌三郎	横山正男	横山與八	春野喜市	田川虎雄
	今村辨次郎	●上原繁雄		駒谷儀右衛門	中山慶太郎		榊井安松		松尾與藏	榊井政治郎	北出政吉	芝甚之助	矢追富夫

南紀中	中紀中	日和佐分	宇佐分	新潟分	肥長分	岡山分	府内分	泉分	上之郷分	尾道分	淀分				
三重縣木本町	和歌山縣田邊町	德島縣日和佐町	大分縣宇佐町	新潟縣中蒲原郡石山村	長崎市	岡山市	京都市	堺市	奈良縣磯城郡上之郷村	尾道市	京都市				
明治二五	明治二五	明治二四	明治二五	明治二八	明治三二	明治二五	明治二五	明治二五	明治二六	明治二六	明治二八				
南海		堺			治道	北	北		城法	北	北				
●西松太郎		●平野辰次郎	●宇都宮右源太郎	池根四郎	會根門之菅	高橋卯治郎	●神澤瀧藏	高田政治郎	樋口幾太郎	平井恒平	茶谷佐平	山本藤四郎	有田政七	吉原ユキ	金山梅藏
		寺島實三郎	宇都宮勉	永尾正信	●橋本梅太郎	高田德基敬	高田德治	樋口覺治	小倉芳治郎	三浦泰次郎	●山本福松	●木村太兵衛	●吉原藤一	●金山孝三郎	
		下村正方	寺島實	鴻田利太郎		伊藤半七	小林豐藏	●小井猶吉				吉原直助			
		下村美和	宇都宮マツ												

和爾支	田原支	上町分	益津分	鐸姫分	網島分	琵琶分	錦江分	大分市分	細川分	栗太分	青野原分
奈良縣櫻本町	奈良縣添上郡田原村	大阪市	靜岡縣藤枝町	香川縣土庄町	大阪市	滋賀縣野洲町	東京市	大分市	神戸市	滋賀縣草津町	兵庫縣瀧野町
明治二五	明治二三	明治二六	明治二三	明治四二	明治四一	明治二六	明治四一	明治二八	明治二六	明治二七	明治二五
奈良			名京	北			麴町	中津	北	北	北
●富森竹松	久保小三郎	堀内藤雄吉	小栗周藏	●奥村利平	寺田好太郎	中石松次郎	寺門きみ	梅田信恒	武田平吉	木村常次郎	廣岡藤吉
富森芳太郎	久保楢治郎	鴻田利吉	●小栗清三郎	●服原龍助	寺田留吉	中田楢吉	●岸本よね	喜泉建馬	水野彌太	●清水睦保	●廣岡富藏
		堀内楢松		河西原治	寺田小近	西村喜之助		●泉田徳藏	●中井寅吉		

一筋宣	朝鮮宣	江戸宣	宮津支	藝備支	高宮支	吉備支	浪華支	天元支	玉江支	名張支	豐繁支
京都市	朝鮮京城府	東京市	京都府宮津町	吳市	滋賀縣高宮町	岡山縣宇野町	大阪市	奈良縣櫻本町	大阪市	三重縣名張町	大阪市
昭和 三	明治四一	明治四二	明治二六	明治三六	明治二六	明治二七	明治四三	大正一五	明治四四	明治二五	明治二八
			府内	北	島ヶ原	西		北	北		
西村喜之助	松村吉太郎	山本大松	●樋口信一	●田口忠教	●三好辰五郎	●南濱喜平	上田楢太郎	中尾淺吉	●石橋トヨ	中川徳藏	今村熊太郎
西村つる	竹鼻堅造	横田龜三郎			川勘五郎	南濱靜	上田ミチ			金山梅藏	青木武助
					塚本惣右衛門	南濱哲衛					柏木捨吉
											●中森初造
											●小山重郎兵衛

鮮京宣	朝鮮京城府	昭和五
三味田宣	奈良縣山邊郡三味田	昭和六
眞昭宣	岐阜縣今尾町	昭和七
南安藝宣	廣島縣竹原町	昭和八
本明實宣	奈良縣生駒郡昭和村	昭和八
八阪宣	大阪府泉南郡南掃守村	明治三〇
雞林宣	朝鮮京城府	大正二
鍛冶惣宣	奈良縣櫻本町	昭和九
道昭宣	神戸市	昭和一〇
更立宣	栃木縣足尾町	昭和一〇
明拜宣	京都府田邊町	昭和一〇
尙久宣	大阪市	昭和一〇
岸部宣	大阪府三島郡岸部村	昭和一一

北

仲田武造	仲田みちゑ
松村吉太郎	村田勇吉
中田由藏	
大濱庄市	
中山慶太郎	
●杉本喜代松	
佐藤松人	岩田長三郎
梶本宗太郎	
増野道雄	増野おたみ
村田益造	
宮森與三郎	宮森與彦
後藤久吉	
平山治助	

守庄宣	大阪市	昭和一一	服部イトヨ (缺員)
滿洲教	滿洲國奉天	大正一五	小島遷次郎
安東教	滿洲國安東縣	明治四四	喜泉建馬 ●高部直太郎
小沙渡教	中華民國上海	昭和九	清水徳重
天津誠華教	中華民國天津	昭和九	平野好松
臺北臺婦教	臺灣臺北市	昭和九	川口ハル
生琉里教	滿洲國天理村	昭和九	橋本正治
加奈陀教	カナダ	昭和九	鈴木亨 田代澤治
滿洲眞勇教	滿洲國新京	昭和一二	村田雄三



本教傳道に關する年譜表

皇紀	年號	天皇	傳道ニ關スル史實
2498	天保9	孝仁	十月二十六日 神憑立教
2499	10		
2500	11		
2501	12		おびやのためしにかゝり給ふ
2502	13		
2503	14	明孝	
2504	弘化元年		神命に依り近隣の女子に裁縫を教へ給ふ
2505	2		
2506	3		
2507	4		秀司先生神命に依り讀書を教へらる
2508	嘉永元年		
2509	2		

皇紀	年號	天皇	傳道ニ關スル史實
2510	3		
2511	4		
2512	5		
2513	6		二月二十二日 夫善兵衛殿歿(六十六歳) 小寒様大阪布教(十七歳)
2514	安政元年		おびやの御供初めて下附さる(一説には安政二年)
2515	2		教祖第三女梶本春子様長男龜造様出産に就きおびやのお許を頂く(安政二年説もあり)
2516	3		
2517	4		
2518	5		清水惣助の妻お雪おびやの許しを頂く
2519	6		
2520	萬延元年		
2521	文久元年		西田伊三郎氏入信 村田幸右衛門氏(年四十歳)
2522	2		飯田岩次郎氏入信
2523	3		仲田儀三郎氏(豊田) 辻 忠作氏(豊田) 入信

2536	2535	2534	2533	2532	2531	2530	2529	2528	2527	2526	2525	2524
9	8	7	6	5	4	3	2	明 治 元 年	3	2	慶 應 元 年	元 治 元 年
明 治												
79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
<p>飯降伊藏氏、榊井伊三郎氏、山中忠七氏、山澤良治郎氏、岡本重次郎氏、上田平治氏入信、この頃大和地方に道ひろまる      十二月中旬 勤場所の建築成る      針ヶ別所 今井助造 むほんを起す 神官僧侶の妨害始まる      初代管長 樺本 梶本家にて御誕生      みかぐら歌の御作製 七月廿三日 秀司先生京都吉田神祇管領家より布教公認さる      喜多治郎吉氏入信      秀司先生、小東松枝殿と御結婚 松村家入信す 松尾市兵衛入信      お節會創る      山本利三郎氏入信      舊十一月十五日 教祖様、山村御殿に於て取調べを受け給ふ      御歸り後神命に依り赤衣を召し給ふ      舊五月廿六日 甘露臺の地點を定め給ふ 増井りん姉入信 小寒様出直さる(三十九歳)      信徒の參詣に便宜を興へ且つ官憲への申開きの爲蒸風呂兼宿屋業を營まる</p>												

2545	2544	2543	2542	2541	2540	2539	2538	2537
18	17	16	15	14	13	12	11	10
明 治								
88	87	86	85	84	83	82	81	80
<p>二月五日 初代管長夫人(玉惠様)御誕生。 松田晋次郎氏、宮森與三郎氏、高井猶吉氏、泉田藤吉氏、矢追檜藏氏入信      この頃河内大阪の傳道盛んになる 土佐卯之助氏入信      板倉榎三郎氏、井筒梅次郎氏入信 一月十七日 松尾市兵衛氏歿す      初代管長樺本の生家を出て中山家の養子として三島に引越さる(御年十五歳)      金剛山下地福寺の出張所となる      四月十日 秀司先生歿(六十一歳)(この頃京都の傳道盛んとなる) 梅谷四郎兵衛氏、深谷源次郎氏、山田伊八郎氏、澤田善助氏、宇野善助氏入信      飯降伊藏氏お屋敷に伏込まる 京都に斯道會生る      御教祖河内松村家に御足勞下さる 舊五月十五日山澤良治郎氏歿す      舊七月十六日甘露臺の石曳きあり この頃兵庫の道隆盛に赴く      諸井國三郎氏、小松駒吉氏、寺田半兵衛氏、茨木基敬氏、上原佐助氏、鴻田忠三郎氏入信      三島に於て雨乞ひ勤めを行ふ      清水與之助氏入信      高井、宮森、井筒の諸氏遠州に布教す      増野正兵衛氏入信      平野檜藏氏入信 上原佐助氏東京に布教す      五月廿三日 神道本局の配下に屬し六等教會となる、この頃布教公認運動行はれしも却下となる</p>								

2550	2549	2548	2547	2546
23	22	21	20	19
八月九日	六月九日	三月十八日	二月十八日	六月二十二日
紺谷久平氏	松村吉太郎氏	山田伊八郎氏	久保小三郎氏	仲田儀三郎氏
飾東支教會を起す (當時兵神部屬)	高安分教會を起す 城島(敷島)分教會を起す	日本橋支教會を起す 田原支教會を起す 藤橋光次郎氏入信	東分教會を起す 撫養支教會を起す 河原町分教會を起す 船場分教會を起す 山名分教會を起す 兵神分教會を起す 郡山分教會を起す	十月二十一日 村田幸右衛門氏歿す 五月神道本局員の視察あり、大神教會の管理を受くる事となる 二月十八日(舊一月二十六日) 御教祖様御昇天 本部神殿増築 山田作治郎氏、畑林爲七氏、山田太右衛門氏、島村菊太郎氏入信 四月十日 神道直轄天理教會本部認可(東京市下谷區北稻荷町四二) 七月二十三日 天理教會本部を現所在地三島に移轉す この頃北陸の道初まる
25	24	23	90	89

2552	2551
25	24
十一月十一日	十二月二十八日
富森竹松氏	同
和爾布教事務取扱所を起す (當時奈良部屬)	機關誌「みちのとも」發行さる
大縣支教會を起す (當時高安部屬)	北分教會を起す
名東支教會を起す (當時撫養部屬)	網島分教會を起す
南紀支教會を起す	高知分教會を起す (當時河原町部屬)
平安支教會を起す (當時河原町部屬)	越乃國支教會を起す
日光支教會を起す	芦津分教會を起す
城法支教會を起す	梅谷分教會を起す
奈良支教會を起す	日和佐支教會を起す
島ヶ原支教會を起す (當時は郡山部屬)	南海支教會を起す
御津支教會を起す	中和支教會を起す (當時郡山部屬)
堺支教會を起す	
中河分教會を起す	
山本利三郎氏	植田平一郎氏
板倉槌三郎氏	北海道布教開始さる
平野辰次郎氏	山田作治郎氏
小松駒吉氏	如林爲七氏
萬田万吉氏	平野辰次郎氏
森川重太郎氏	笹西治郎兵衛氏
市川榮吉氏	井筒梅次郎氏
速水岩吉氏	宇野善助氏
飯田岩次郎氏	島村菊太郎氏
下村賢太郎氏	寺田半兵衛氏
正木國藏氏	茨木基敬氏
增井幾太郎氏	
八月二十六日	
三月二十五日	
三月十四日	
二月二十六日	
二月二十三日	
一月二十三日	
27	26

2556	2555	2554	2553
29	28	27	26
八月六日	三月二十九日 十一月十三日 十一月二十四日	三月二十九日 四月十八日 五月二十八日 七月二十九日 九月二十六日 十二月十四日	一月十七日 三月八日 五月二十日 五月二十四日 十月六日 十二月二十八日
上田善兵衛氏	諸井國三郎氏 山本利三郎氏 上村吉三郎氏	富松梢治郎氏 能美賢一郎氏 上田平治氏 前川喜三郎氏 西田伊三郎氏 中臺勘藏氏 石塚松次郎氏	中西金次郎氏 岸本又次郎氏 宇都宮右源太氏 矢追梢造氏 近藤政慶氏 山田太右衛門氏 藤橋光次郎氏
麴町支教會を起す(當時北部屬)	臺灣布教開始 支那布教開始さる 琉球布教開始	櫻井支教會を起す 筑紫支教會を起す(當時河原町部屬)	大江支教會を起す 八木布教所を起す 宇佐布教事務取扱所を起す 治道布教事務取扱所を起す 上町支教會を起す 甲賀支教會を起す(當時河原町部屬) 水口支教會を起す(當時河原町部屬)
31	30	29	28

2565	2564	2563	2562	2561	2560	2559	2558	2557
38	37	36	35	34	33	32	31	30
七月十二日	四月二十三日 四月二十六日	七月二十九日	三月十七日 十一月二十二日	九月九日 五月十三日 一月十五日	四月一日	十二月二十九日 十二月十六日 九月二十六日	十二月二十四日 九月一日	一月一日
辻忠作氏	現管長(中山正善)様御誕生 澤田善助氏 泉田藤吉氏	鴻田忠三郎氏	湖東支教會、河原町分教會より分離、分教會に昇格(會長佐治登喜治良) 山中忠七氏	甲賀支教會、河原町分教會より分離、分教會に昇格(會長山田太右衛門) 清水與之助氏 水口支教會、河原町分教會より分離、分教會に昇格(會長藤橋光次郎)	天理教校開校す	奈良縣廳より天理教校設置認可さる 山田作治郎氏 大縣分教會分離す(當時高安分教會部屬)	井筒梅次郎氏 池四郎平氏 安堵事件(水屋敷事件)起る	新潟支教會を起す
40	39	38	37	36	35	34	33	32

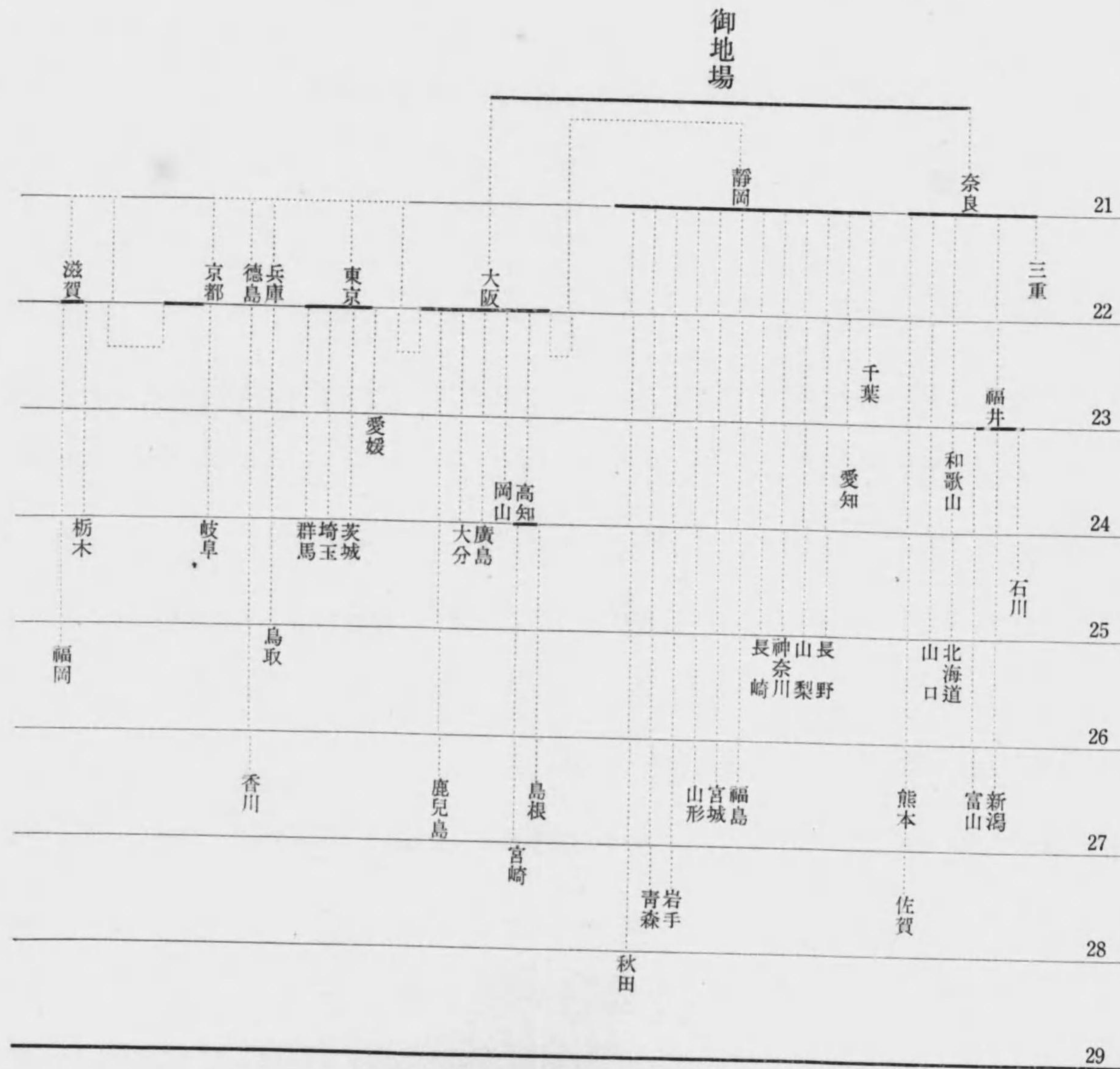
2582	2581	2580	2579	2578	2577	2576	2575	2574	2573	2572	
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	大正元年	45
大 正											
			九月一日	五月二十九日	六月二十七日	六月二十二日	十一月十一日	八月二十一日	一月八日	一月二十二日	三月十一日
			中西金次郎氏歿す	梅谷四郎兵衛氏歿す	松田晋次郎氏歿す	諸井國三郎氏歿す	喜多治郎吉氏歿す	山田伊八郎氏歿す	前管長様の葬儀執行さる	増野正兵衛氏歿す	上原佐助氏歿す
									初代管長様御歸幽	アメリカカ布教開始さる	
									中山正善殿、管長製職		
									山澤爲造氏管長攝行の件文部大臣より認可さる		
18	17	16	15	14	13	12	11	49	48	47	

2571	2570	2569	2568	2567	2566
44	43	42	41	40	39
一月二十九日	二月二十一日	三月二十九日	六月九日	六月十七日	三月二十九日
島村菊太郎氏歿す	宇野善助氏歿す	高田邦三郎氏歿す	寺田半兵衛氏歿す	平野楢藏氏歿す	六月九日(舊四月二十九日) 本席、飯降伊藏翁歿す(七十五歳)
	英國布教開始(船場系統)	山本勉氏	朝鮮布教管理所内に教義講習所を設置す		
	構太布教開始	江戸宣教所を起す	茶谷佐平氏 泉支教會を起す		
	榑井伊三郎氏歿す	豊繁宣教所を起す	内務大臣より布教の一派獨立を許可さる		
	浪華宣教所を起す	朝鮮宣教所を起す	内務大臣より初代管長就職認可		
46	45	44	43	42	41

	2586	2585	2584	2583
	昭和 元年	15	14	13
	上	今		
	四月二十二日			十月十七日
	富松楢次郎氏歿す			深谷源次郎氏歿す
				十一月二十三日
				名京大教會(會長諸井忠彦)山名大教會より分離す
	22	21	20	19

(ス示ヲ年ノ置設會教可認部本ハ字數)

# 表覽一線道傳縣府



伊藤野矢著 一覽表

昭和十四年四月廿五日印刷  
昭和十四年五月十日發行



編輯者 奈良縣二階堂村田井之庄 土佐 元

發行所 奈良縣丹波市町川原城 天理教道友社  
右代表 岡島善次

印刷所 奈良縣丹波市町川原城 天理教教應印刷所  
右代表 紺谷金彦



392  
373

Faint, illegible text within a rectangular border on the right page.

終

